

福井県埋蔵文化財調査報告 第142集

太 田 ・ 小 矢 戸 遺 跡

— 一般県道本郷大野線道路改良工事に伴う調査 —

2 0 1 3

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、大野市太田・小矢戸地区において一般県道本郷大野線道路改良工事に伴い実施した、太田・小矢戸遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査は、中部縦貫自動車道と並行する道路敷設のため削平される水田部分を対象としました。調査の結果、古代の掘立柱建物や中世の井戸などを検出するとともに、旧河道や溝からは弥生時代や古代の遺物が多く出土することを確認しました。特に古代の須恵器には転用硯や墨書の施されたものを認めるなど、当地に識字層が存在したことを示唆しています。また、文字の判読はできませんが、中世の将棋の駒も出土しました。

今回の発掘調査により、長期間・広範囲にわたる多様な痕跡が確認でき、当地が古くから拠点的な生活域であったことが判明し、今後の研究に活用できる重要な資料を得ることができました。今後、本書が県民の方々の埋蔵文化財に対するご理解を深める機会となるとともに、郷土の歴史研究の進展の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成25年 3 月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 佐 藤 圭

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが一般県道本郷大野線道路改良工事に伴い、平成21年度に実施した太田・小矢戸遺跡（福井県大野市太田・小矢戸所在）の発掘調査報告書である。
- 2 太田・小矢戸遺跡の調査は、福井県奥越土木事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、木村孝一郎、杉山大晋、石川敦子が担当した。
- 3 発掘調査は、平成21年4月1日から平成21年10月30日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成22年4月1日から平成25年3月29日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は木村があたり、田中勝之、宮崎認、杉山拓己（現 奈良県立橿原考古学研究所）が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。
木村 第1章、第2章、第3章、第4章 第1節、第2節 3中世の土器、4土製品、7木製品、第5章
田中 第4章 第2節 5石器 6石製品
宮崎 第4章 第2節 2古代の土器
杉山 第4章 第2節 1縄文・弥生時代の土器
- 5 太田・小矢戸遺跡に関するこれまでの成果発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 遺構の挿図作成は木村が、遺物の挿図作成は各執筆分担者が行った。遺構の写真撮影は木村が、遺物の写真撮影は石器・石製品を田中が、以外を青木隆佳が行なった。
- 7 本書に掲載した遺構図は、中央測量株式会社に委託して作成したものを一部改変して使用した。
- 8 遺構配置図には、中部縦貫自動車道建設事業に伴う発掘調査との合成図を使用した。
- 9 本書における遺構の略記号は、以下の通りである。
SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SE（井戸）、SD（溝）、SR（河道）、SP（柱穴）
- 10 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位はすべて座標北を用いた。また、X・Y座標値は国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。
- 11 遺構図の縮尺は1/40・1/60・1/80を、遺物実測図の縮尺は1/4を基本としたが、種別や大きさにより適宜、異なる縮尺も用いた。
- 12 遺物挿図と写真図版の遺物番号は符号しており、写真の縮尺は不同である。
- 13 観察表では、土器類の胎土の項目を便宜上、次の4つに分類している。①径1mm以下の砂粒を少量含む、②径1mm以下の砂粒を多量含む、③径1～2mmの砂粒を含む、④径2mm以上の砂粒を含む。
- 14 遺構断面の土色と遺物の色調観察は、新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に拠る。
- 15 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 16 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの作業員があたった。

目 次

第1章	調査の経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
第2章	遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第3章	調査の概要	7
第1節	層序	7
第2節	遺構の構成と分布	7
第3節	遺物の構成と分布	8
第4章	遺構・遺物	10
第1節	遺構	10
第2節	遺物	19
第5章	まとめ	37
第1節	古代の遺構・遺物	37
第2節	中世の遺構・遺物	37

図 版 目 次

図版第1	遺構	(1) 0～4列遺構検出状況(南東より)	図版第3	遺構	(1) SK09(南東より)
		(2) 5～13列遺構検出状況(南東より)			(2) SK12(北西より)
		(3) 14～26列遺構検出状況(南東より)			(3) SK05・06・07(西方より)
		(4) 14～26列遺構検出状況(北西より)			(4) SK16遺物出土状況(西方より)
図版第2	遺構	(1) SB01(北方より)			(5) SD01(北西より)
		(2) SB03(南方より)			(6) SD02(東方より)
		(3) SB04(南方より)			(7) SR01(東方より)
		(4) SB05(北方より)			(8) SR02(北東より)
		(5) SE04(南東より)			
		(6) SE05(北西より)			
		(7) SE07(南方より)			
		(8) SE13(北東より)			

図版第4 遺物 縄文土器・弥生土器
図版第5 遺物 古代の土器
図版第6 遺物 古代の土器

図版第7 遺物 中世の土器・陶磁器
図版第8 遺物 石器・石製品・木製品

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置図	1	第15図	弥生時代の旧河道SR03実測図	19
第2図	調査区略図とグリッド配置図	2	第16図	縄文・弥生土器1	21
第3図	大野・勝山盆地の地形模式図	3	第17図	縄文・弥生土器2	22
第4図	周辺の遺跡分布図	5	第18図	古代の土器1	23
第5図	土層柱状模式図	7	第19図	古代の土器2	25
第6図	遺構配置図	9	第20図	古代の土器3	26
第7図	掘立柱建物SB01・SB05実測図	11	第21図	古代の土器4	27
第8図	掘立柱建物SB02・SB04実測図	12	第22図	中世の土器・陶磁器1	28
第9図	掘立柱建物SB03実測図	13	第23図	中世の土器・陶磁器2	29
第10図	井戸実測図1	14	第24図	土製品	30
第11図	井戸実測図2	15	第25図	石器	30
第12図	土坑実測図	16	第26図	石製品	31
第13図	柱穴実測図	17	第27図	木製品	31
第14図	溝・旧河道断面図	18			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5	第8表	古代の土器観察表	33
第2表	掘立柱建物属性表	10	第9表	中世の土器・陶磁器観察表	35
第3表	井戸属性表	15	第10表	土製品観察表	35
第4表	土坑属性表	16	第11表	石器観察表	36
第5表	溝属性表	18	第12表	石製品観察表	36
第6表	縄文土器観察表	32	第13表	漆器観察表	36
第7表	弥生土器観察表	32	第14表	木製品観察表	36

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

太田・小矢戸遺跡は、福井県大野市太田・小矢戸地籍に所在する。同地籍は大野盆地西部に位置し、北流する赤根川左岸の山麓地沿いに発達した小規模な旧扇状地が段丘化した河岸低位段丘上に立地する。

同遺跡は、福井県教育委員会が実施した県内全域の分布調査により『福井県遺跡地図 平成4年度』で「太田遺跡」および「小矢戸旗鉾遺跡」として周知された。

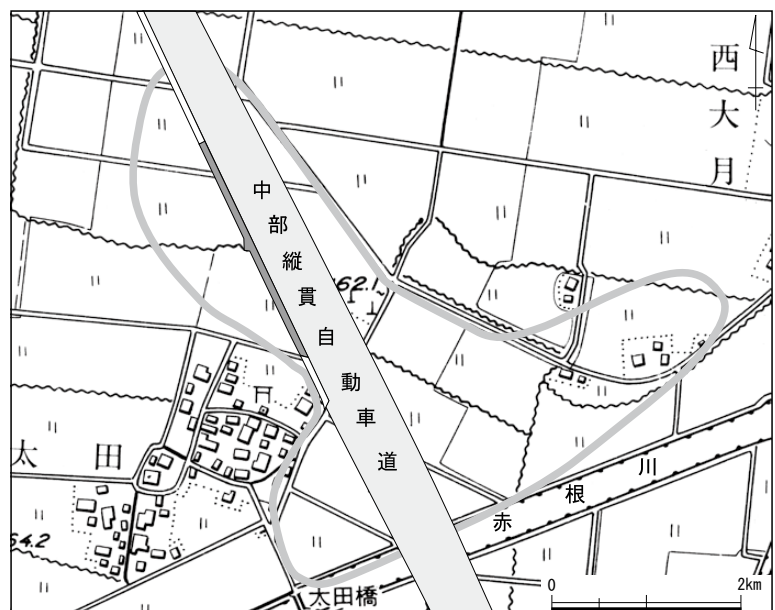
昭和62年に国の道路審議会答申により高規格幹線道路網整備が計画され、県内でも福井市から長野県松本市を結ぶ中部縦貫自動車道の整備が具体化した。同道路は、北陸自動車道福井北インターチェンジを起点とし九頭竜川左岸を東進し、岐阜県内を通過し長野県松本市に至る総延長約160kmにおよぶ一般国道158号線の自動車専用道路化として計画された。県内では、まず起点地から大野市中津川へと至る延長26.4kmの「永平寺大野道路」と呼称する区間において事業着手となり、本線に先立ち並行する一般国道のバイパス道建設工事に伴う発掘調査を福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が平成元年から実施した。また、平成元年以降の県埋文による詳細分布調査の結果、平成6年には「永平寺大野道路」区間の遺跡分布状況が一応確定した。その後、中部縦貫自動車道の計画が勝山市から大野市に至る区間での具体化に伴い、路線内に存在する遺跡の試掘調査が本格化し始め、福井県教育庁文化課（以下、文化課）と県埋文は現国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所（以下、国土交通省）との協議の結果、勝山市域、永平寺町域、大野市域の発掘調査を順次実施することとなった。

太田・小矢戸遺跡の試掘調査は、平成18年に県埋文が実施し、事業予定区域内の水田に設定した試掘坑51箇所を重機と人力で掘削した結果、表土層直下で包含層を確認するとともに、遺構を検出した。

この結果を受け、国土交通省と文化課および県埋文が協議を行い、記録保存のための緊急発掘調査を行うこととなり、平成19～22年の4年間、中部縦貫自動車道区域（以下、中縦区）の調査が実施された。

中縦区の発掘調査が実施されるなか、同道路と並行する一般県道本郷大野線改良事業が計画された。奥越土木事務所の依頼を受けた県埋文が、発掘調査の必要な中縦区の西側で試掘調査を実施した結果、県道改良事業に伴う発掘調査面積1,810㎡が確定し、平成21年度に発掘調査を実施することとなった。

なお、当初、別遺跡とされていた「太田遺跡」と「小矢戸旗鉾遺跡」は、中縦区の調査の進展で中断なく連続する集落遺跡であることが判明した結果、一遺跡として捉えることが妥当となり、「太田・小矢戸遺跡」と改称され、遺跡範囲も第1図の通りに変更された。



第1図 遺跡の位置図(縮尺1/8,000)

第2節 調査の経過

調査区は道路改良工事に伴う調査であるため南北に細長く、農業用道路と排水路で分断されていた。現地では、便宜上、調査区を3地区に分け、南から順に1区、2区、3区と呼称して、調査を進めた南から区毎に遺構番号を付け整理段階まで活用した。調査に際しては、県道区は中縦区と地続きで調査区北端も共通するため、10m×10mのグリッドを設けた中縦区の東西A～E列に次ぐF列を、南北も同様に0～26列を配したが、東西幅の狭い調査区のため、F列はE列から5m地点に設けた。グリッド名は北西隅の交点で示し、以下「F1」のように表記する。なお、調査は現況が水田であった範囲より着手し、農業用道路と排水路下は9月中旬以降の着手となった。

発掘調査は表土除去作業から開始した。表土除去の結果、調査区全体に遺物包含層である黒色土を確認した。また、F8・9では前年度に中縦区の調査で確認した旧河道の続きを視認した。

同作業終了後、調査区西壁と南北杭沿いに、土層と遺構密度を把握するためのトレンチを設定した。この作業によりF24～26およびF20で弥生時代後期の、F8・9で古代の旧河道、F18の中世溝以南で井戸を検出し、各時代の遺構が複合する拠点の遺跡であることが判明した。

包含層は人力で掘削し、トレンチで区画されたグリッド毎に遺物を取り上げた。包含層除去後、随時精査による遺構検出と平板測量を併行し、配置に規格性を有する柱穴を把握した。その後、遺構の掘り下げを開始し、土層断面実測図作成の作業を終えた後に完掘し、必要に応じ実測図や写真で記録した。

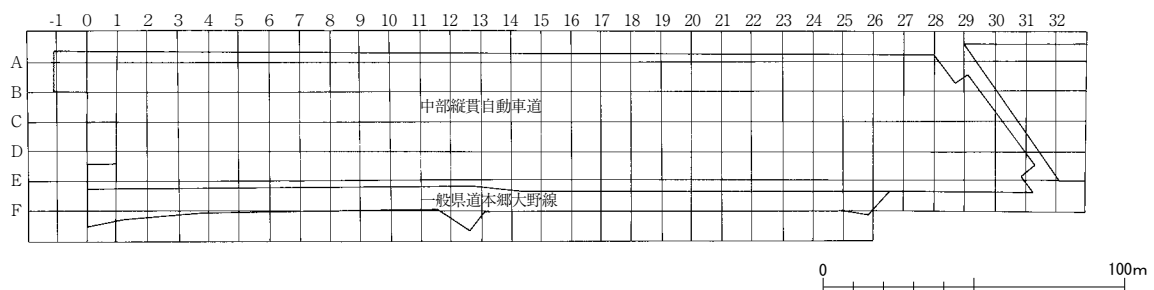
以上の作業を継続した結果、7月17日に1区の航空写真測量を行い、8月6日の全景写真撮影終了後は、埋没後に構築された遺構の記録のために測量後としたF20に位置する弥生時代後期の旧河道掘削を随時行い、9月17日に2・3区の航空写真測量を実施し、18日に全景写真を撮影した。稲の収穫後には農業用道路と排水路下の調査を行い、10月30日に現地作業を終了した。また、10月に本調査と併行して県道際に構築される側溝部分の立会調査を実施した。

発掘調査終了後の遺物整理は、翌年の平成22より24年度にかけて下記の作業を実施した。

平成22年度は、洗浄、注記、仕分け作業を行った。

平成23年度は、接合、復元、一部の実測とトレース作業を行った。なお、接合作業は、中縦区出土品との接合関係を考慮し実施した結果、旧河道出土品を中心に定量が接合できた。

平成24年度は、遺物の実測とトレース作業、遺構のトレース作業、遺物の写真撮影と原稿執筆を行い報告書を作成した。なお、報告書の作成時に各区の遺構番号を通し番号へ変更した。



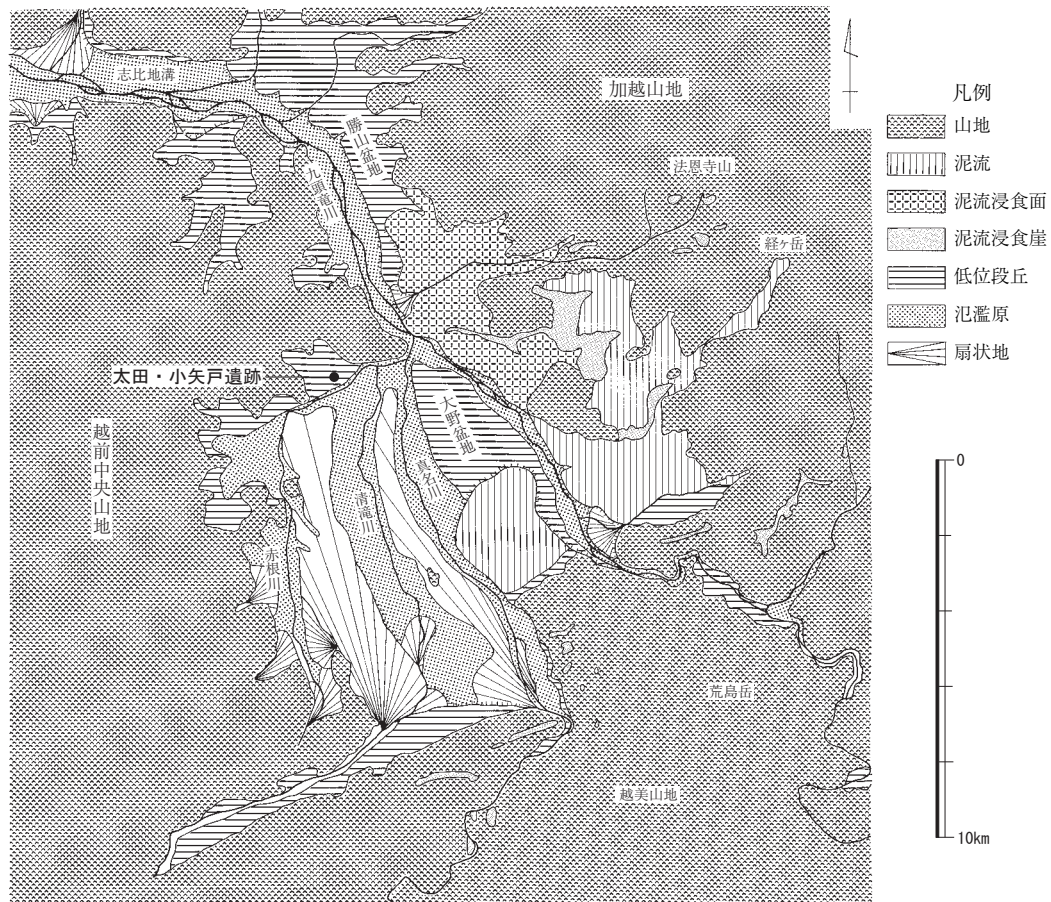
第2図 調査区略図とグリッド配置図(縮尺1/2,500)

第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境（第3図）

太田・小矢戸遺跡の所在する大野市を包括する嶺北地方は、周囲の多くを山地に囲まれ、北西部のみが日本海に開く。九頭竜川に合流し日本海に抜ける主要河川流域には沖積平野が形成され、奥越地方の九頭竜川流域には大野・勝山盆地が展開する。

周囲を越前中央・加越・越美山地に囲まれた東西7km、南北9kmの大野盆地は、段層に起因する凹地に流入する河川が運搬した砂礫と東部に展開する経ヶ岳の火山活動で生じた泥流とが埋積した堆積盆地で、南方から九頭竜川、真名川、清滝川、赤根川の4河川が北流する。盆地を形成した堆積物は豊富な地下水を含むため、中央を流れる清滝川が赤根川との間に形成した高位面を持つ木本扇状地末端で「清水」と呼ばれる伏流水が現在も豊富に湧き出る。蛇行して北流する赤根川の左岸地域でも盆地北西部には大小の丘陵突出により小盆地状の地形が展開し、応徳3年（1086）に「絹の荘園」と呼称される牛原荘の立荘する低湿地帯が広がる。他地域で不規則な地割状況を示すのに対し、同地帯から西方山麓の低位段丘には条里地割が現在も残るため農耕に適した地域と判断できる。一方、盆地東部には低位面を持つ扇状地を形成した真名川と、前記の2河川が合流する九頭竜川が流れる。九頭竜川もかつて扇状地を形成したとされるが、経ヶ岳の火山活動で生じた泥流により地形を失っている。泥流は高尾山により遮られた結果、手前に多量の火山物質が堆積した六呂師高原、更に西方の大野盆地まで流出したことで塚



第3図 大野・勝山盆地の地形模式図(縮尺1/200,000)

原野台地を形成した。真名川と九頭竜川に挟まれた東西2km、南北3kmの塚原野台地は後に開拓されたが、泥流地形の標識である泥流丘が無数に散在する。また、同台地の北方にも扇状地は広がるが、3河川の中でも規模の大きい真名川と火山性台地を切断して北流する九頭竜川は、近年まで氾濫を起こしており、遺跡数が極端に少ない点を考慮すると、真名川以東は農耕や居住には不適な地域と判断できる。

第2節 歴史的環境（第4図）

本遺跡の所在する大野盆地北西部は、赤根川・真名川間に位置し、条里制に関する大字を残す旧下庄村の大野郡資母郷とされ、赤根川と越前中央山地に挟まれる旧乾側村に牛原荘を立荘した生活に適する地で、九頭竜川に合流して日本海に抜ける小河川は物質流通にも活用されてきた。以下、本遺跡と時期を同じくする弥生時代後期から古代・中世の遺跡を中心に述べ、必要に応じて大野盆地全体に触れる。

旧石器時代の遺跡は未確認だが、縄文時代の遺跡は複数みられ、山ヶ鼻古墳群（30）と東稲葉古墳群（31）の調査で土器や石器、県埋文が実施した縄境遺跡（46）の調査で晩期に属する土器や打製・磨製石斧、中丁乗末遺跡（55）で晩期の土器棺が出土している。また、木本扇状地最高地点の湧水地東部で前期から後期まで営まれた右近次郎遺跡は大規模で、通称「義景池」付近でも土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、主に赤根川流域に分布する特徴を持つ。大野市では不明点の多い時代だったが、盆地西部を主とする大規模開発に伴う調査で様相が解明されている。圃場整備事業に伴う県埋文の調査で、犬山遺跡（52）の旧赤根川とされる遺構より後期から古墳時代初頭の、下丁遺跡（49）で中期から古墳時代初頭の土器、中丁乗末遺跡1号土坑から後期に属する銅鐸形土器が出土し、右近次郎西川遺跡で後期の玉作り関連遺物と住居跡を検出している。また、氾濫原の広がる赤根川南部流域にも上舌遺跡や深井春日前遺跡が展開する。

弥生から古墳時代にかけて築造された墳墓は、一部を除き盆地西部の赤根川以西に広がる低丘陵上に分布する特徴を持つ。この内、大野市の調査で弥生時代中期から古墳時代前期に亘る墳墓群とされた山ヶ鼻古墳群を除き、当概期の出土遺物を認めない東稲葉古墳群を含めて未調査のため築造時期の特定は困難だが、丘陵に群を形成する方墳の多い点から大半は5世紀以前に属するとの指摘がある。一方、偶発的に埋葬施設や副葬品が出土したことで築造時期を特定できる古墳も存在し、横穴式石室を有する大矢戸古墳（3）および城目古墳群（28）の4号墳からは6世紀末葉の須恵器が出土している。

古墳時代の集落遺跡は、古墳の分布との対応関係から盆地西部の赤根川流域に展開するはずだが、未調査のため多くは特定できない現状にある。しかし、尾永見遺跡（38）を稲荷山古墳群（37）築造者の集落とする指摘があり、右近次郎西川遺跡でも7世紀代の遺物が出土しているため、今後に期したい。なお、赤根川南部流域の新庄遺跡では古墳時代後期に属する掘立柱建物20棟を検出している。

古代には遺跡の分布範囲が拡大し、真名川以西の盆地西部全域に展開する。下丁遺跡で掘立柱建物数棟を検出し、中丁乗末遺跡と尾永見遺跡でも土器が出土している。また、清滝川流域に位置し、県埋文の調査で掘立柱建物と竪穴住居数十棟を検出した横枕遺跡は、円面硯や八稜鏡の出土から官的な倉庫群とされ、同遺跡南方に位置する中保小政戸遺跡（16）の調査でも同時期の遺構を検出しており、清滝川流域に集落遺跡の点在することが判明した。表採遺物には、平城宮木簡の「越前国大野郡調銭」の記述にも認める山ヶ鼻古墳群の皇朝十二銭や字名「太田」付近の瓦片がある。

中世には牛原荘のほかに、盆地南部に「地頭（方）」や「領家（方）」の字名を多く残す小山荘などが立荘する。牛原荘域の遺跡には県埋文の調査で掘立柱建物を検出した下丁遺跡や中丁乗末遺跡があり、



第4図 周辺の遺跡分布図(縮尺1/50,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な時代	種別	現況	番号	遺跡名	主な時代	種別	現況
1	太田・小矢戸遺跡	縄文・弥生・飛鳥～中世	集落跡	水田・宅地	33	天神堂遺跡	奈良～中世	散布地	水田
2	下荒井城跡	中世	城跡	山林	34	牛ヶ原城	中世	城跡	山林
3	大矢戸古墳	古墳	古墳	山林	35	牛ヶ原城	中世	城跡	山林
4	小矢戸九紋目遺跡		散布地	水田	36	坂戸下遺跡		散布地	水田
5	磐座神社遺跡		祭祀跡	水田	37	稲荷山古墳群	古墳	古墳	山林
6	大矢戸遺跡		散布地	水田	38	尾永見遺跡	縄文～中世	集落跡	水田・宅地
7	西大月遺跡		散布地	水田	39	滝本遺跡	弥生・古墳	散布地	水田
8	南新在家縄手遺跡		散布地	水田	40	六反田遺跡	弥生・古墳	散布地	水田
9	森目遺跡		散布地	水田	41	寺町遺跡	弥生・古墳・中世	散布地	水田
10	南新在家松本遺跡	奈良・平安・中世	散布地	水田	42	矢狹間遺跡		散布地	水田
11	中津川黒之上遺跡	奈良・平安	散布地	水田	43	西市遺跡		散布地	水田
12	横枕遺跡	奈良～中世・近世	集落跡	水田	44	中野遺跡	奈良・平安・中世	散布地	水田
13	友江遺跡		散布地	水田	45	下田遺跡	縄文～中世	集落跡	水田
14	中保坪ノ内遺跡		散布地	水田	46	縄境遺跡	縄文～古墳・中世・近世	集落跡	水田・宅地
15	田野遺跡		散布地	水田	47	坂戸遺跡	古墳	散布地	水田
16	中保小政戸遺跡	奈良・平安	集落跡	水田	48	花山古墳群	古墳	古墳	山林
17	菖蒲池遺跡	古墳～中世	散布地	水田	49	下丁遺跡	弥生・古墳・平安・中世	集落跡	水田
18	庄林西小柴遺跡		散布地	水田	50	中丁堂明下遺跡	奈良・平安	散布地	水田
19	庄林深見遺跡	古墳～中世	散布地	水田	51	大山村下遺跡	奈良～近世	散布地	水田
20	中津川阿弥陀遺跡		散布地	水田	52	大山遺跡	弥生・古墳・中世	集落跡	水田・宅地
21	庄林大尾遺跡	古墳	散布地	水田	53	丁古墳群	古墳	古墳	山林
22	庄林広繁遺跡	奈良・平安	散布地	水田	54	中丁堂ノ下遺跡	中世・近世	集落跡	水田
23	太田山下遺跡		散布地	水田	55	中丁栗末遺跡	弥生・古墳	集落跡	水田
24	御茶ヶ端古墳群	古墳	古墳	山林	56	上丁畔遺跡		散布地	水田
25	御茶ヶ端城跡	中世	城跡	山林	57	上丁栗原遺跡	古墳	散布地	水田
26	目録古墳群	古墳	古墳	山林	58	犬山古墳群	古墳	古墳	山林
27	矢前田遺跡	奈良・平安	散布地	水田	59	戌山城	中世	城跡	山林
28	城目古墳群	古墳	古墳	山林	60	清滝遺跡	中世	散布地	水田
29	矢西畑遺跡	古墳～中世	散布地	水田	61	大野城	近世	城跡	公園
30	山ヶ鼻古墳群	縄文・弥生・古墳	古墳	山林	62	明倫遺跡	近世	散布地	宅地
31	東稲葉古墳群	縄文・古墳	古墳	山林	63	西方寺城	中世	城跡	山林
32	中大門遺跡	縄文	散布地	水田	64	土橋城	中世	城跡	水田

両遺跡から和鏡が出土している。赤根川南部流域では下黒谷経塚が特筆に値し、新庄遺跡でも14世紀の鍛冶関連の掘立柱建物を検出している。山城は、元弘3年(1333)に平泉寺衆徒が攻め滅ぼした地頭・淡川時治の牛ヶ原城跡(34・35)など盆地内の要所に認める。なお、南北朝期に斯波氏が築城して戦国期にも大野郡を統制した戌山城跡(59)廃絶以後は、木本扇状地高所の湧水帯に金森長近築城の大野城跡(61)が中心となり、清水を用いた酒造業などの産業で城下は栄える。

参考文献

- 大野市教育委員会 1982 『右近次郎遺跡Ⅰ』
- 大野市教育委員会 1985 『右近次郎遺跡Ⅱ』
- 大野市教育委員会 1980 『山ヶ鼻古墳群Ⅰ』
- 大野市教育委員会 1993 『山ヶ鼻古墳群Ⅱ』
- 大野市教育委員会 1990 『新庄遺跡現地説明会資料』
- 大野市史編さん委員会 1987 『大野市史 図録 文化財編』
- 佐々木伸治 1997 「新庄遺跡」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1995 『尾永見遺跡 下田遺跡 縄境遺跡 犬山遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997 『尾永見遺跡Ⅱ』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『右近次郎西川遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『中丁遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『下丁遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『上舌遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997 『第12回発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 『第13回発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 『第14回発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『第17回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『第18回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『第19回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 『第20回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『第21回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『第23回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『第24回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『第26回福井県発掘調査報告会資料』

第3章 調査の概要

第1節 層序（第5図）

太田・小矢戸遺跡の発掘調査では、グリッド杭を基準に東西方向に土層観察用の畦を設定し、各々の土層対比を行いながら調査を進めた。調査区は道路改良工事に伴う調査であるため南北に細長いが、層の厚さの差異を除くと基本土層はほぼ共通しており、第Ⅰ層から第Ⅲ層の3つに大きく分層できる。

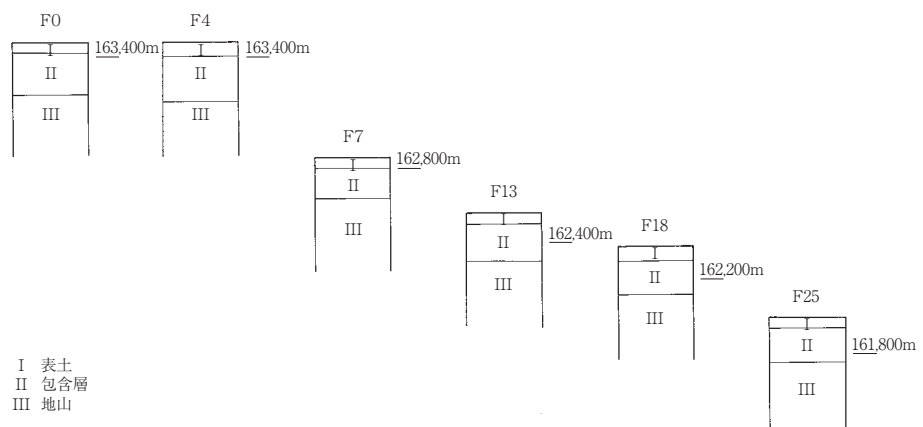
第Ⅰ層は、層厚が30cm前後を測る灰褐色粘質土層で表土に相当する水田の耕作土層である。基本的には水平堆積を成すと判断するが、調査前の重機による表土除去作業実施のため詳細は不明な点が多い。

第Ⅱ層は、層厚が20cm前後を測る黒褐色粘質土層である。微細な炭化物を含む第Ⅱ層は遺物包含層と判断でき、調査区内では基本的に水平堆積を成す。古代の主要遺構の上層となり多くの遺物を含む。

第Ⅲ層は、周辺環境で土色に変化する粘質土層の地山層である。第Ⅲ層上面が遺構検出面である。

以上が、本調査区の基本土層である。調査では第Ⅲ層上面を遺構検出面としたが、本来の遺構構築面は遺構の遺存および遺物の出土状況から第Ⅱ層中に存在した可能性が高い。ただ、遺構覆土も同質の黒褐色粘質土であるため、明確に遺構を確認できる第Ⅲ層上面を遺構検出面とした。また、第Ⅲ層上面の標高が北端で163.2m、南端で161.7mである点は、本遺跡が南方の赤根川へ緩やかに傾斜する旧地形に立地することを示す。旧地形は遺構の遺存状況も反映し、遺構深度は旧地形の高い北側ほど基本的に低い。なお、トレンチ掘削段階で、弥生時代後期の土器を多く含む旧河道を確認した。古代・中世の遺構

検出面である第Ⅲ層が不安定な色調を呈する旧河道上面でも、古代・中世の遺構を認める。ちなみに東方・南方と向きを変える中縦区での旧河道の様相は、旧地形の様相の反映と理解できる。



第5図 土層柱状模式図

第2節 遺構の構成と分布（第6図）

今回の調査区1,810㎡で検出した主要遺構は、一定の間隔で方形に柱穴列を構成する掘立柱建物5棟、土坑19基、井戸13基、溝25条、旧河道2条と柱穴多数である。

掘立柱建物は全て中縦区および調査区外に伸びるため調査区内で全体把握は無理だが、全て南北方向に棟を持つ側柱建物である。F 2～4、F 14・15～16・17、F 22・23に分布するが、SB03・04は中縦区検出の建物群から分離しており、SB05は遺物の分布状況から中世に属すると考える。また、SB04以北は明確な遺構がなく、中縦区A～C 1で検出した旧河道が北限となる可能性が高い。なお、SB01以

東に古代の畝状の溝、F 18に中世の集落境と推察されるSD02が東西に伸びる。

土坑は、垂直に掘り込み、底面中央に小穴1基を設けた平面円形状の時代不詳の一群が、F 10～12で直線的に分布する。SK05～07とSK13～16の古代の土坑はF 8とF 13付近で群を成す。

中世の遺構は、SD02以南に分布するが、F 21・22とF 25には井戸と柱穴が濃密に分布する。前区域では柱穴に木柱や敷石を認めるため、認定した1棟以外の建物の存在が推察される。

旧河道は、F 17～20で弥生時代後期のSR03、F 8・9で古代のSR01、F 10・11で中世のSR02を検出した。

遺構分布の希薄な区と濃密な区の差は大きく、特にSB04以北は希薄で、試掘調査で調査区以北は低地とされるため遺跡の北限と理解できる。また、F 5～7、F 12付近も構成が単純で分布も散漫である。一方、SD02以南の調査区以西には現集落が展開しており、遺跡の廃絶時期と現集落への移動時期が一致する可能性が高い。なお、出土遺物からみた遺跡の廃絶時期は16世紀前半頃である。

第3節 遺物の構成と分布

本調査区出土品の大部分は土器で、ほかに中世陶磁器、石器・石製品および木製品が出土した。

遺物の多くは、弥生時代後期と古代の土器で主に旧河道出土品である。ただ、古代の土器は遺物包含層に散在するが、弥生時代後期の土器は旧河道など僅かな遺構に認めるのみで摩耗品が多い。また、当概期の明確な遺構はF 25・26検出のSD01に限るため、本遺跡の西部、或いは本遺跡と北西方向の丘陵間に生活域が展開し、旧河道に廃棄した遺物が下流域にある遺跡内で堆積したと推察できる。

遺物包含層である第Ⅱ層からの出土遺物の分布と主要遺構の分布とは重複しており、当時の消費行動に伴う生活拠点の周囲への遺物廃棄が窺える。また、分布は時代でも異なり、古代の遺物はSD02以北、中世の遺物はSD02以南で主に認める。時代毎の遺物の出土状況の偏在性と前節の遺構の分布状況から、上記の傾向は遺構の属する時代を反映すると判断できるが、SD02以北でも中世の遺構や遺物は認める。

弥生時代の遺物は、後期の土器のほか定量の打製石斧がSR03から出土した。打製石斧は縄文時代後期から晩期、弥生時代にかけて越前地域で多く出土するが、本調査区の当概期の遺物は僅かなため、全国的に打製石斧が消失する弥生時代後期のものと判断できる。

古代の遺物は、SB01・03付近で纏まり、SR01および周辺で多量に出土した。須恵器中心の構成で、定量認める墨書土器、転用硯は識字層の存在を示す。性格別では、供膳具は須恵器が主で灰釉陶器と土師器が補完する。貯蔵具に須恵器を、煮沸具に土師器を認めるが、供膳具同様、土師器の占める量は僅かである。

中世の遺物の量は少なく、土師質土器と越前焼および輸入陶磁器から成る。SD02とその周辺のほかSE05・08など越前焼が出土した遺構が濃密なF 21・22に纏まる。SD02以北ではSR02から定量の越前焼が、F 7に位置するSK18から将棋の駒と瀬戸焼の華瓶を模倣した土師質土器が出土した。また、包含層出土品ながらF 9・19で青白磁合子を認める。木製品はSE08出土の漆器椀、石製品には石臼がある。

遺構、遺物の出土状況と年代からは、本調査区では弥生時代後期の旧河道が埋没した後、8～9世紀に古代の集落が営まれ、多少の混在はあるものの主に13世紀代と15世紀後半～16世紀代の遺物が多い点を考慮すると、両期を中心にSD02以南で中世の集落が営まれたと判断できる。



第6図 遺構配置図(縮尺1/400)

第4章 遺構・遺物

第1節 遺構

本調査区の遺構は、掘立柱建物・井戸・土坑・溝・旧河道・柱穴などで全て第Ⅲ層上面検出である。各遺構の規模の数値は、第Ⅲ層上面を基準として、測量図面上で測定・算出した概測値である。なお、出土品の詳細は、本章第2節および観察表（第6～14表）に記載した。

1 掘立柱建物（第7～9図）

遺構とした多数の柱穴の内、方形を基調とし規格的に配置される柱穴列を掘立柱建物と認定し、柱間の多い方を桁行、少ない方を梁行とする。建物規模は、各柱穴列の両端に位置する柱穴中心間で、柱間表記は間数で記載した。なお、柱穴は全てが直線的な配置でなく、隅柱間を結ぶ線上に柱穴が並ばない例もあるため、横断面の図には全ての柱穴の断面を視認できるよう投影し、図上で合成した例もある。なお、各建物の計測値などは、掘立柱建物属性表に示した。

SB01 F16・17に位置する。桁行3間で4.8m、梁行2間で3.5mを測る南北方向の側柱建物である。桁行西側のP02は主軸から外れるが、東側は筋が通り、略円形の掘方の規模は0.5～0.7mを測る。SB01以東には古代の畝状の溝8条が東西に伸び、建物内部で深さ0.2mを測るSK03を検出した。

SB02 F14・15に位置する南北方向の側柱建物だが、柱穴は建物南西部の4基の検出に留まる。

SB03 F3・4に位置する。排水路整備の削平を認めるが、桁行4間で9.0m、梁行1間で5.0mを測る南北方向の側柱建物である。柱痕跡を認める桁行西側の柱穴の内、P02は主軸から外れるが、東側は筋が通り、楕円形を呈する掘形の規模は0.8～1.0mを測る。SP374からは墨書土器が出土した。

SB04 F16・17に位置する。桁行4間で7.0m、梁行2間で4.2mを測る南北方向の側柱建物である。径の狭いP06とP03およびP04は主軸から外れ、楕円形を呈する掘形の規模は0.7～1.0mを測る。

SB05 F22・23に位置する南北方向の側柱建物だが、柱穴は建物南西部の3基の検出に留まる。

古代に属するSB01・03・04は、床面積が20㎡以下のA類と30～50㎡のB類に分かれ、掘形規模と床面積からA類は簡易な倉庫、B類は主屋の付属棟と判断する。また、建物の主軸をほぼ北方とする規則的な配置には本遺跡の性格の一端が窺えるが、この点は出土品の検討を通じて後述する。なお、SB02・05は、建物南西部の数基の検出のため略述するに留めた。以下、掘立柱建物を除く主要な遺構を抽出して概要を記す。詳細は各遺構の属性表を参照されたい。

2 井戸（第10・11図）

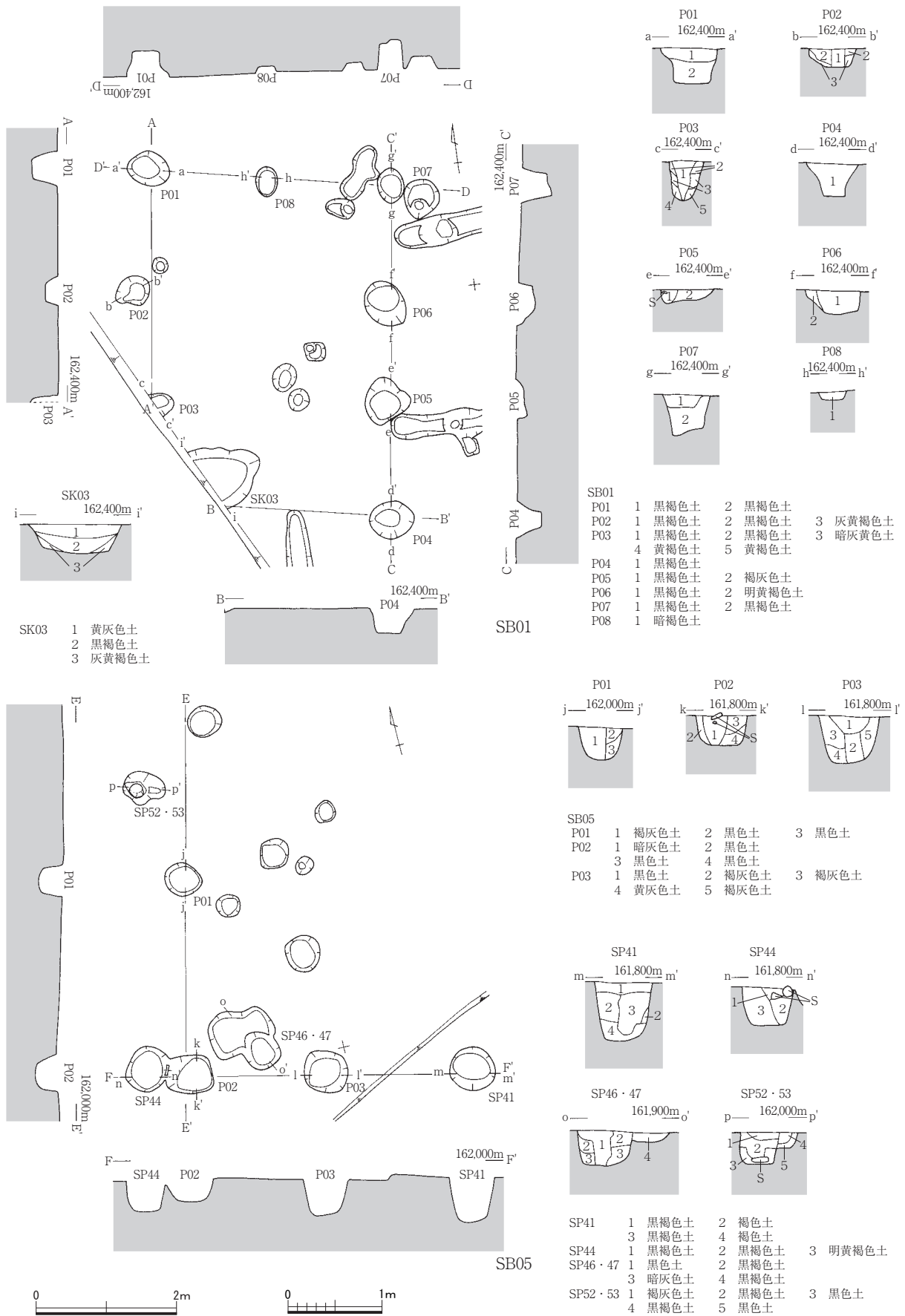
上部長軸径よりも深く掘削する遺構の内、下部に粘質土の堆積を認めるものを主に井戸として扱う。本調査区ではSD02以南で、中世に属する素掘り井戸が密に分布する。平面形態は円形状のものが主で、掘形の上部分がハの字状に開くA群と筒状のB群に分類できる。

第2表 掘立柱建物属性表

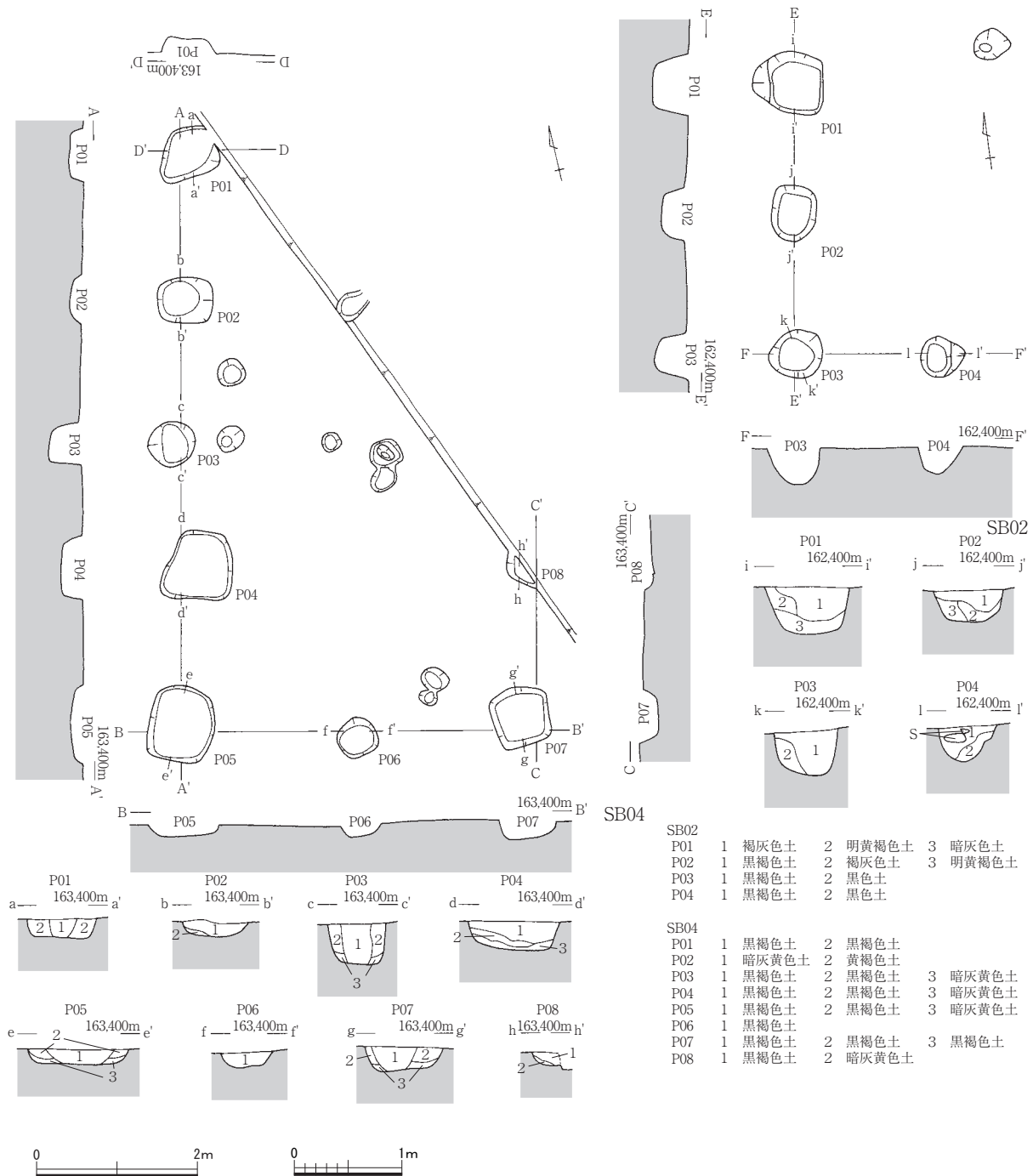
単位：m

遺構名	グリッド	構造	規模			柱間幅		出土遺物	備考
			柱間	桁行	梁間	桁行	梁間		
SB01	F16・17	側柱	3×2	4.8	3.5	1.4～1.8	1.7～1.8	P01・05・06 土師器 P06・03 須恵器	SK03 土師器 須恵器
SB02	E14・F14・15	側柱	4×3	7.0	5.0	1.7～1.9	1.7～1.9	P01・03・04 土師器 P03 須恵器	
SB03	F3・4	側柱	4×1	9.0	5.0	2.0～2.6	5.0	P01～08 土師器 P01（墨書）・02・04・05・06・08 須恵器	SP373・374・375 土師器 須恵器一定量出土
SB04	E・F2	側柱	4×2	7.0	4.2	1.6～2.0	2.1～2.2	P01・05・06・07 土師器 P05 須恵器	
SB05	E・F22・23	側柱	3×2	7.2～8.0	6.0	2.0～3.2	2.6～3.3		

第1節 遺構



第7図 掘立柱建物SB01・SB05実測図(縮尺1/60、1/80)

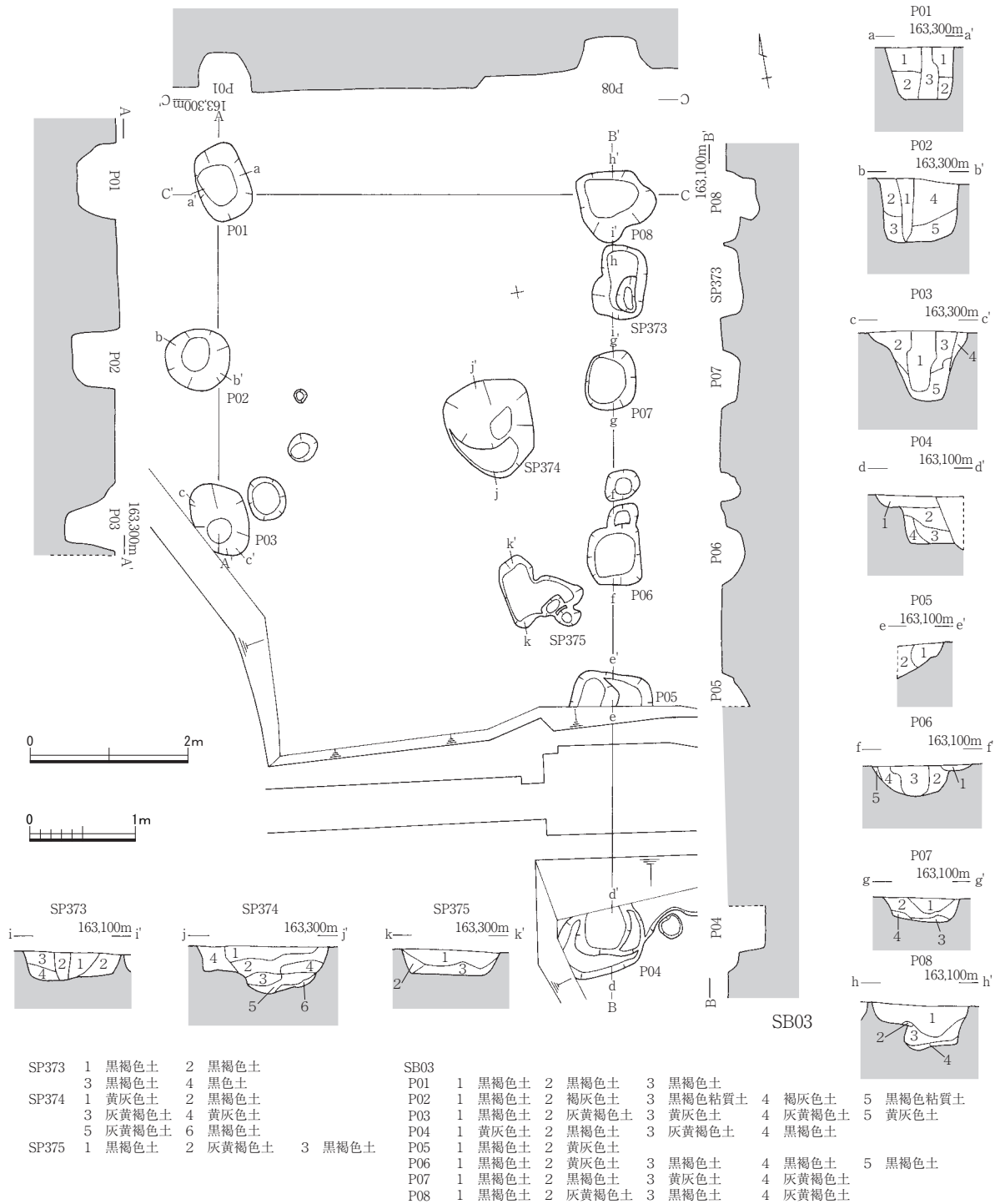


第8図 掘立柱建物SB02・SB04実測図(縮尺1/60、1/80)

A群 上部径はSE05・13で2.1m、SE08・10で1.7mを測る。

B群 上部径はSE01・02・03・04・06・07・09・11で0.9~1.2m、SE12で1.4mを測る。

上部径と下部径は関連性があり、下部径はA群が0.8~1.1m、B群が0.6~0.8mに収まる。作業の安全性から掘削深度を制限したため底面検出は4基に留まるが、SE09~11の深度は1m程で井戸以外の性格も推察できる。断面観察では、下層ほど粘性が強く水平に堆積する一方、上層は小礫を多量に含む弱粘性の土が複雑に堆積する例が多い。井戸周辺に柱穴が濃密に分布する点を考慮すると、井戸の廃絶後に、小礫を混ぜた強固な土で埋めて、居住空間を持続させたと判断できる。なお、長期の利用を意図した井戸側の曲物の使用は掘削深度内では認めない。SE03・05・07・08・13から中世の遺物が出土した。

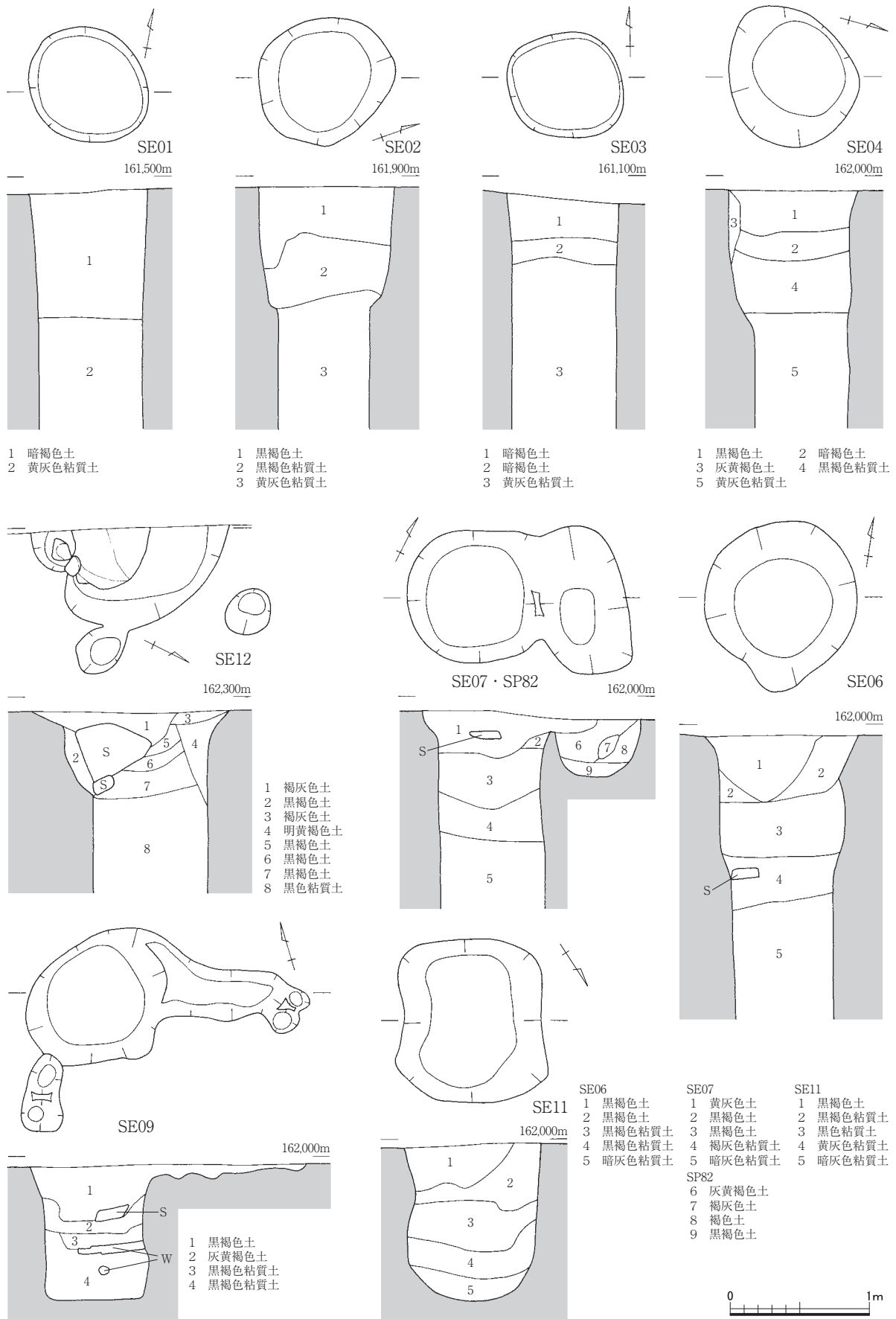


第9図 掘立柱建物SB03実測図(縮尺1/60、1/80)

3 土坑 (第12図)

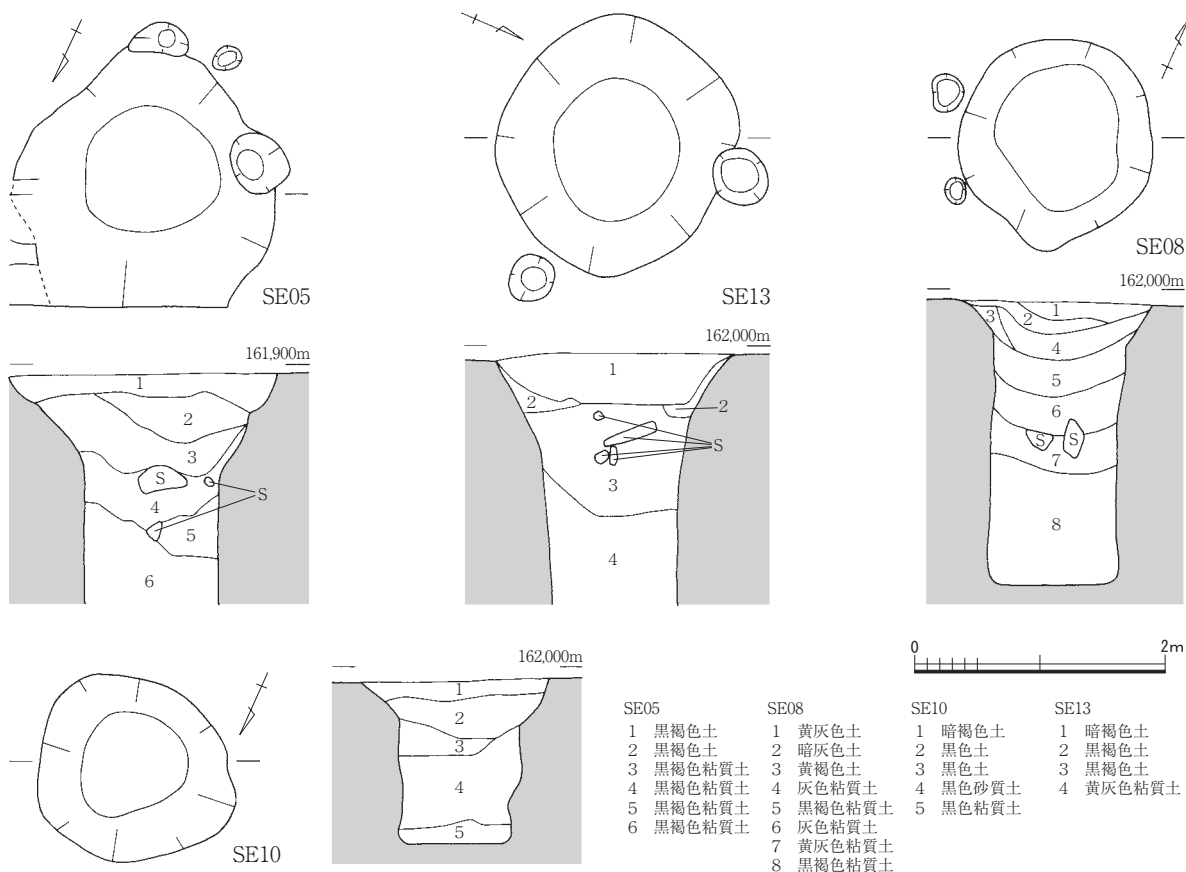
平面規模より深度の浅い、用途不明な遺構を土坑として扱う。

陥穴状遺構 SK09・10・12は垂直に掘り込み、底面中央に小穴1基を設けた円形を呈する一群で、上面径0.8～1m、底面中央の小穴は径0.2m程を測り、F10～12で直線的に分布する。SK10を除き水平堆積で、小穴の覆土は全て粘質土である。出土品および他遺構との重複がないため構築時期は不明だが、形状から陥穴状遺構と認定する。丘陵上に立地する県内の検出例も、等間隔に配する計画性を認める。



第10図 井戸実測図1 (縮尺1/40)

第1節 遺構



第11図 井戸実測図2 (縮尺1/60)

第3表 井戸属性表

単位：m

遺構名	グリッド	井戸側	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
SE01	F25	素掘り	円形状	筒型	0.9	0.8	不明		
SE02	F25	素掘り	円形状	筒型	1.0	0.9	不明		
SE03	F25	素掘り	円形状	筒型	0.9	0.75	不明	土師質皿	
SE04	F22	素掘り	円形状	筒型	1.05	0.9	不明		
SE05	F22	素掘り	円形状	筒型	2.1	2.05	不明	須恵器 土師器 土師質皿 越前焼甕	
SE06	F21	素掘り	円形状	筒型	1.2	1.1	不明		
SE07	E21	素掘り	円形状	筒型	0.95	0.9	不明	越前焼甕	SP82と重複
SE08	F21	素掘り	円形状	筒型	1.7	1.55	2.5	須恵器 越前焼甕・播鉢 漆器椀	
SE09	F19	素掘り	円形状	深鉢型	1.05	0.9	0.95		土師質皿と越前焼甕を含むSD16と連結
SE10	F19	素掘り	円形状	深鉢型	1.7	1.45	1.3		
SE11	F19	素掘り	円形状	深鉢型	1.1	1.1	1.1		
SE12	F22	素掘り	円形状	筒型	1.4	1.4	不明		
SE13	F21	素掘り	円形状	筒型	2.1	2.1	不明	土師器 土師質皿・鍋 越前焼甕	

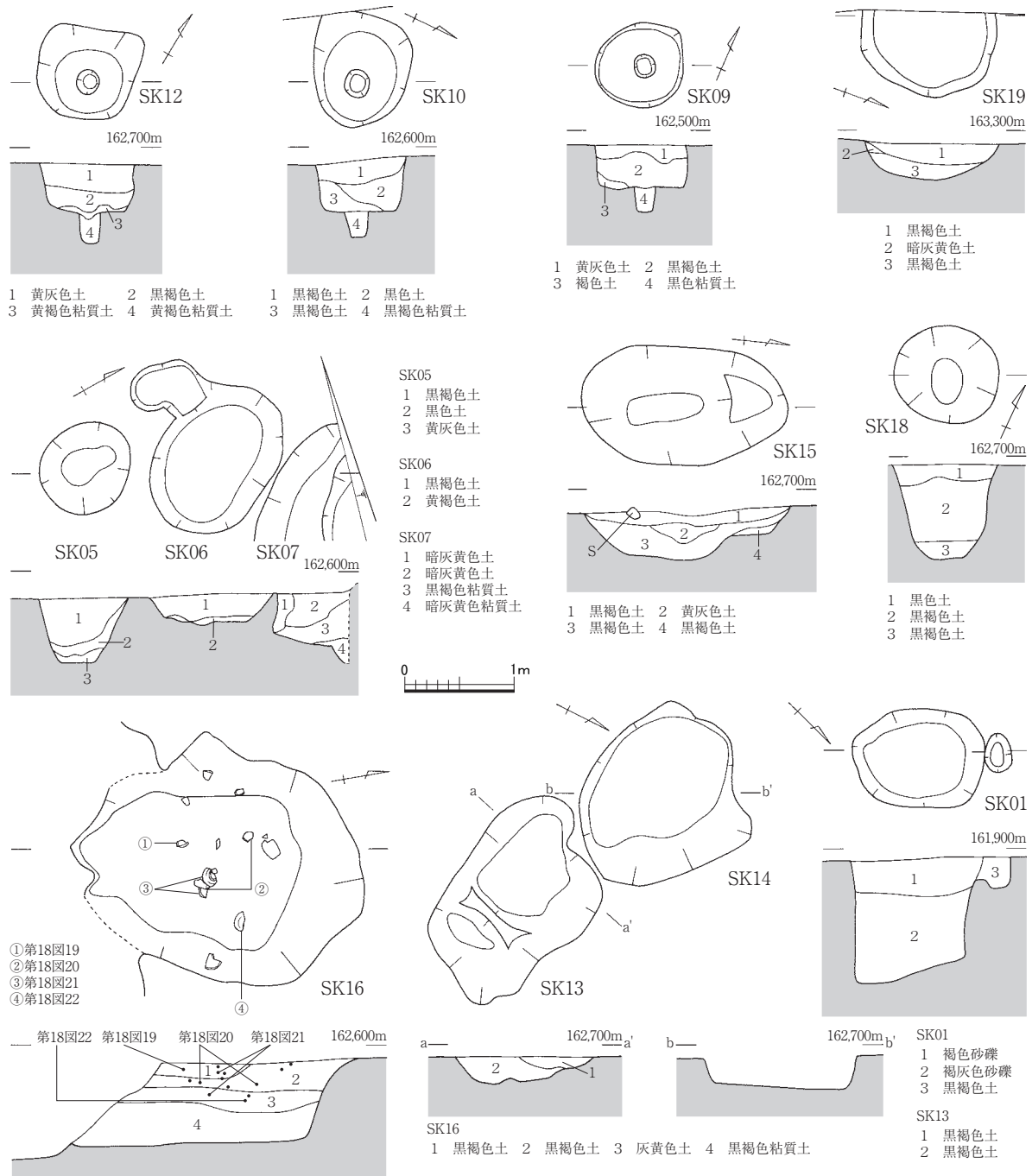
土坑群1 SK05～07は、SB02北辺に展開する土坑群の一部で、SK07の大半は中縦区に属する。

土坑群2 SK13～16は、SR01北辺に展開する土坑群で、SK16から須恵器と土師器が多く出土した。

平面形態は楕円形で、長軸規模と旧河道との前後関係は調査の不手際で不明である。覆土の堆積過程は3段階だが、遺物は床面になく、第一次堆積層よりも上位の出土である。SK15・13、SP315、SR01出土品と遺構間で接合するため、ほぼ同時期に埋没したと判断できる。

SK01 SE02と近接し、覆土は全て砂礫層である。周辺に井戸が散在するため、井戸を掘削段階で廃棄し強固に埋めた可能性が高い。なお、底面は南側に向けて傾斜する。

SK18 将棋の駒と瀬戸焼の華瓶を模倣した土師質土器が出土した中世の遺構である。覆土は、黒色土と黒褐色土が水平に堆積する。周辺の中世の遺構は、土師質皿が出土したSP291のみである。

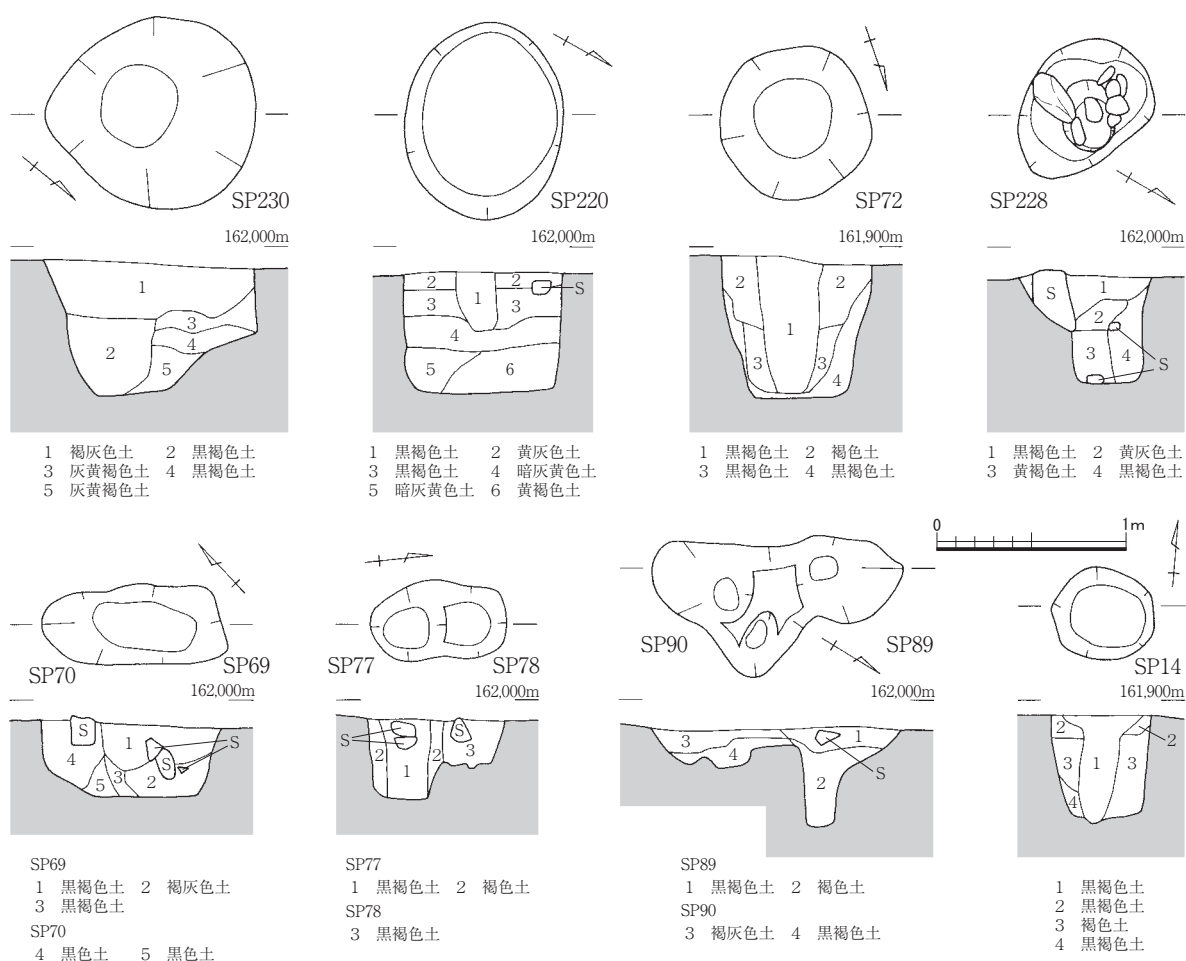


第12図 土坑実測図(縮尺1/60)

第4表 土坑属性表

単位: m

遺構名	グリッド	平面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
SK01	F25	楕円形状	1.2	0.9	1.15		
SK03	F17	不整形	—	0.5	0.2	土師器 須恵器	
SK05	F13	円形状	0.85	0.8	0.6	土師器 須恵器	
SK06	F13	円形状	1.45	1.05	0.25	土師器 須恵器	
SK09	F12	円形状	0.8	0.8	0.6		
SK10	F11	円形状	1.05	0.9	0.75		
SK12	F10	方形	1.05	1.0	0.7		
SK13	F8	不整形	2.0	1.3	0.25	土師器 須恵器	SR01、SK15・16、SP283と遺構間接合
SK14	F8	不整形	1.7	1.5	0.3		
SK15	F8	楕円形状	1.9	1.1	0.45	土師器 須恵器	SR01、SK13・16、SP283・315と遺構間接合
SK16	F8	楕円形状	1.85	1.5	0.3	土師器 須恵器	SR01、SK13・15、SP283・315と遺構間接合
SK18	F7	円形状	0.95	0.9	0.85	須恵器 黒色土器 土師質土器・花瓶 将棋駒	
SK19	F4	円形状	1.2	—	0.35		



第13図 柱穴実測図(縮尺1/40)

4 柱穴 (第13図)

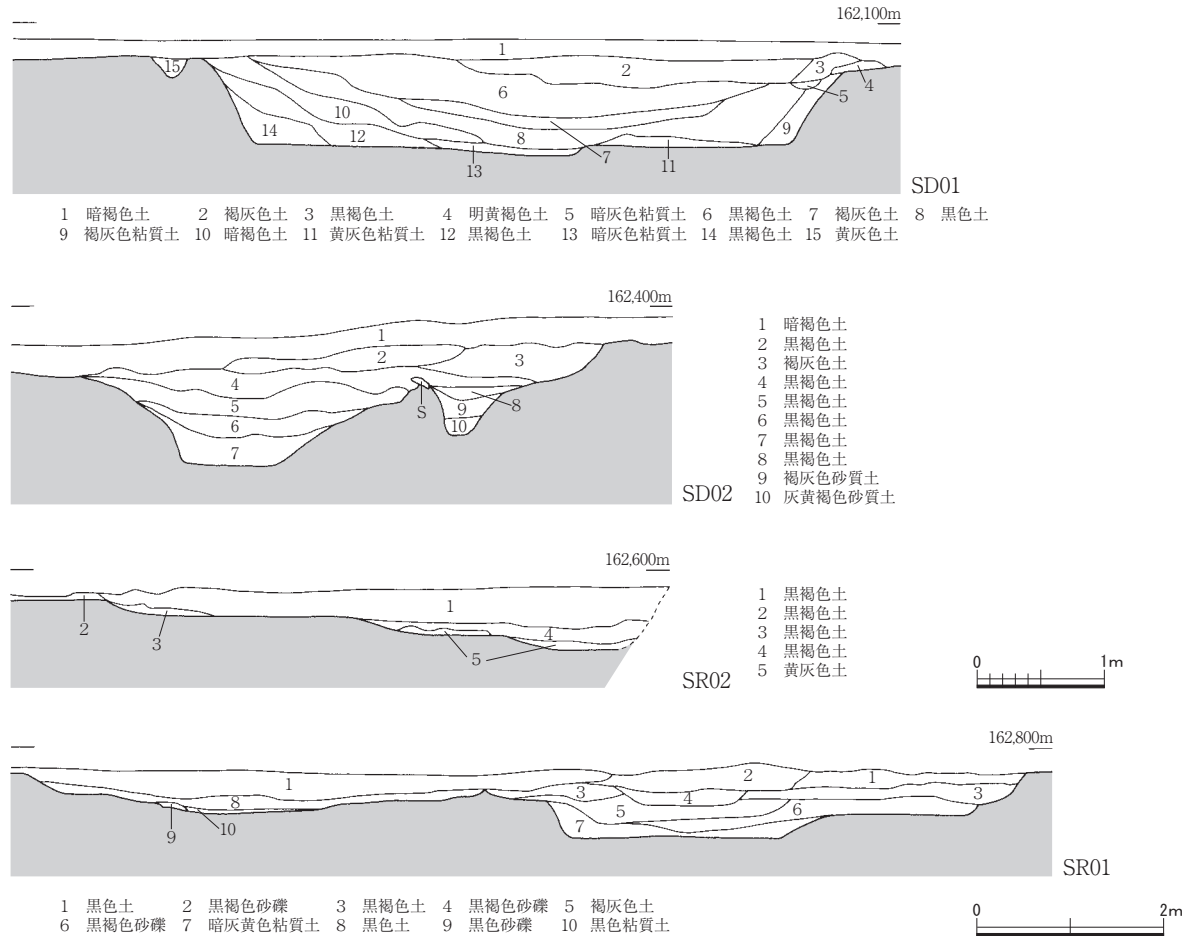
本項では、断面に柱痕跡を認めた中世の柱穴を中心に概略を記す。

本調査区では、SD01西辺のF 25、SB05を含むF 21・22に中世の、SB02南辺のF 15に古代の柱穴が密に分布する。F 20に位置するSR03上面付近は希薄で、建物構築時に軟弱な地盤を意図的に避けた結果ともいえる。上面径が0.3～0.45m、0.45～0.65m、0.65m以上に分類できる中世の柱穴の規模と柱径とは比例し、上面径0.8mを測るSP72の断面には0.3mの柱痕跡を確認した。また、柱痕跡は認めないが、SP220・230も柱穴の可能性が高く、F 22の調査区外に大型構造物が展開したと推察できる。倒壊防止の側石を設けるSP228のほか、柱材の沈下防止の根石を設けるSP52 (第7図)・60・235・260もある。なお、F 15に局所的に展開する古代の柱穴3基は直線的な配置で柱穴列とも判断できる。北方のSB02との関連性は不明だが、主軸が一致するため、ほぼ同時期の遺構と理解する。

5 溝 (第14図)

溝状を呈する遺構の内、掘形の明瞭な溝を中心に概略を記す。

素掘小溝群 SD04～11・19は、F 17に位置する東西方向の溝群である。幅0.2～0.6m、深さ0.1 m程の規模で、等間隔に並列する様相は畝の畝間に似るが機能の限定は困難である。SD04からは須恵器の高坪が出土した。なお、溝群西方のSB01との前後関係は不明である。



第14図 溝・旧河道断面図(縮尺1/60、1/80)

第5表 溝属性表

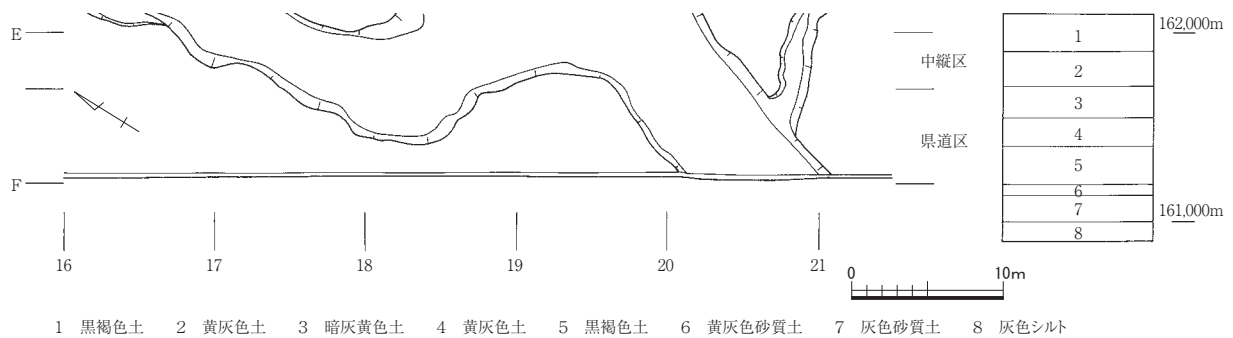
単位：m

遺構名	グリッド	方向	幅	深さ	出土遺物	備考
SD01	F24・25・26	北→南	4.9～5.1	0.8～0.9	弥生土器	細片が多量に出土
SD02	A・B・C・D19、E・F18	西→東	3.0～3.65	0.55～0.7	弥生土器 古代土器 中世土器・陶磁器	川原石を定量含む
SD03	F18	北→南	0.25～0.45	0.05～0.1		
SD04	D18、E・F17	西→東	0.45～0.55	0.05～0.1	土師器 須恵器	
SD05	F17	西→東	0.25～0.4	0.05～0.1	土師器 須恵器	SD07と連結
SD06	F17	西→東	0.3～0.35	0.05～0.1	土師器	SD07と連結
SD07	F17	北→南	0.25～0.35	0.05～0.15		SD05・06・09と連結
SD08	F17	西→東	0.25～0.65	0.05～0.1	土師器 須恵器	SD09と連結
SD09	C18・D・E・F17	西→東	0.35～0.65	0.05～0.1	土師器 須恵器	SD07・08と連結
SD10	D・E・F17	西→東	0.3～0.4	0.05～0.1	土師器 須恵器	
SD11	F16、D・E・F17	西→東	0.3～0.45	0.05～0.15		
SD13	E・F23	東→西	0.3～0.6	0.05～0.15		
SD18	C・D21、E・F20	東→西	1.4～2.7	0.15～0.2	弥生土器	
SD19	F17	西→東	0.2～0.25	0.05～0.1		
SD20	F17	北→南	0.2～0.35	0.05～0.1		

SD01 F 24～26に位置する弧状を呈する溝で、幅4.9～5.1m、深さ0.8～0.9mを測る。覆土は地山に似る7・10・13層と黒色、黒褐色土の互層でレンズ状に堆積する。弥生土器の細片が多く出土した。

SD02 F 18に位置する東西方向の中世の溝で、幅3.0～3.6m、深さ0.6～0.7mを測る。炭化物を含む覆土の堆積過程は5段階で、13世紀頃までの遺物と河原石を含む。この溝を境として以北では中世の遺構・遺物とも希薄となるため、集落境の溝と判断する。

SD18 F 20に位置する東西方向の弥生時代後期の溝で、幅1.4～2.7m、深さ0.2m程を測る。覆土は黒褐色の単層で、弥生土器の細片が多く出土した。なお、SR03との新旧関係は不明である。



第15図 弥生時代の旧河道SR03実測図(縮尺1/500)

6 旧河道(第14・15図)

SR01 F 8・9に位置する東西方向の河道で、幅8.0~9.6m、深さ0.8m程を測る。最下層の7・10層の粘質土上の覆土は、黒色土などと礫・砂礫層の互層である。2・4層に大粒の礫を多く含むことは、埋没段階までの強弱の異なる恒常的な水流を物語る。一定量の墨書土器を含む須恵器が多く出土した。

SR02 F 10・11に位置する南北方向の河道で、幅1.8~3.8m、深さ0.5m程を測る。覆土の堆積過程は3段階だが、小礫を含む最下層の5層を除く比較的安定した土質は、水流の弱さを物語る。出土品の多くは越前焼で、13世紀と15世紀後半の2時期に分かれるため長期の流水を窺える。

SR03 中縦区を北から南東方向に蛇行し本調査区に至る河道で、埋没後に第Ⅱ層が堆積する。上層が古代・中世の遺構検出面である第Ⅲ層と近似し、平面的な掘形の確認は困難であった。遺物の出土状況を観察して掘削を進めたため、規模は不確定要素を含むが、幅8.0m、深さ0.45~0.75mを測る。壁面の崩落で断面観察は不十分だが、最下層のシルト上の6・7層は砂質土で、5層には炭化物を含む。出土品の多くは、次節で述べる弥生時代後期の土器と打製石斧である。

第2節 遺物

本調査区出土品の大部分は弥生時代後期の土器と古代の須恵器で、SD02以南で定量出土した中世の土器・陶磁器が次ぐ。また、遺構の性格上、掘立柱建物を構成する柱穴や井戸からの出土は微量で、旧河道出土品の占める割合が高い。本節では旧河道を含めた遺構出土品を主に扱うが、SR01上面の遺物包含層と上層の出土品の様相は大きく異ならず、事実、接合した資料も多いため、包含層出土品も図化に努めた。なお、灰釉陶器や黒色土器など、遺跡の性格に繋がる遺物は細片でも掲載している。以下、主に旧河道から出土した弥生時代後期と古代の土器を述べた後に、中世の土器・陶磁器、土製品、石器、石製品、木製品の順に触れる。

1 縄文・弥生時代の土器(第16・17図)

本項では旧河道を中心に出土した弥生土器を報告する。以下の記述は特に重要と考える事柄に留めており、各資料の詳細は第6・7表に譲る。なお、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉にかけての時期区分は福井県嶺北地方を対象とした杉山編年を使用する。時期は、後期後葉が1・2段階(法仏式)、終末期が3・4段階(月影式)、古墳前期前葉が5段階(漆町5・6群)にあたる。

1~3はSD01出土品である。1は甕で内外面ともにハケメを施す。2は粗製で厚手の甕である。外面にナデ調整を施すものの凹凸が目立ち、内面に接合痕を残す。3は壺の口縁部でハケメを施す。ヨコナデを施す端部に沈線状の凹みをもつ。細かな時期の特定は難しいが、後期後葉に位置付けられる。

57はSD18出土の有段口縁擬凹線文甕である。58はSD17出土の甕の胴部で、ハケメ調整の後に先端が二又状の原体で列点文を施す。原体や施文部位が有段口縁擬凹線文甕に通有の例と異なるため、受口状口縁甕の胴部である可能性が高い。上記の2点も後期後葉に位置付けられる。

SR03からは多くの弥生土器が出土した。甕と壺の型式や器種組成から後期後葉を主体と考えるが、後述するように明らかに時期が下る資料や縄文土器も含む。

甕は無文の有段口縁をもつものと、擬凹線文を施文する有段口縁をもつもの、受口状口縁をもつものに大別できる。17は有段口縁擬凹線文甕で、典型的な終末期の甕の特徴をもつ。有段口縁の擬凹線文は13条を数え、上半部が外反して内面に指頭圧痕がみられる。11は甕形の小型品で、内外面にナデ調整を施す。胎土は砂が少なく精良で、煮炊に使用された痕跡はない。

26は小型の壺の口縁部で、端部外面に帯状の赤彩を施す。27は直立する頸部をもつ精製品の壺で、外面にはヘラミガキ調整に加え赤彩を施す。二重口縁壺の可能性が高く、古墳前期前葉と考えられる。

高杯は杯部に稜をもち口縁端部内面が肥厚する29・30、同様の杯部をもち単純口縁の31・32、鉢形の杯部を持つ33・34の三者に大別できる。

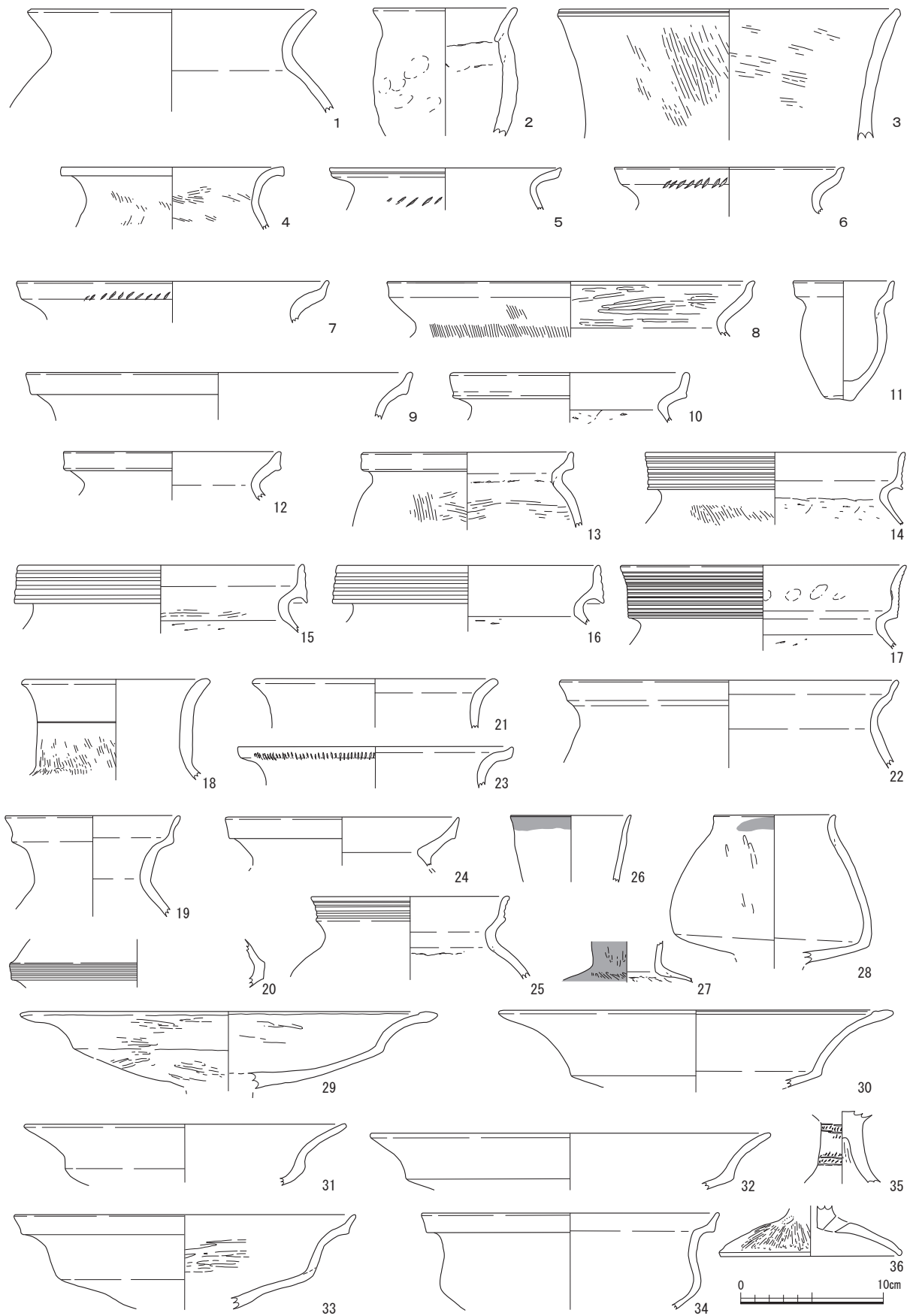
48は受口状口縁をもつ鉢で口縁部外面に右上がりの櫛描列点文を、頸部直下に櫛描直線文と波状文を重ねる。53は半球状の鉢形のミニチュア品で、内外面にナデ調整を施す。

54～56は縄文土器の破片で、混入品と判断した。54は晩期の鉢で、内傾する口縁部外面に扁平な突帯をもつ。突帯部は中央を口縁に平行する沈線で区画し、下半に右下がりの押圧を加える。口縁端部に面をもつ。55は器壁がやや薄い晩期の鉢で、口縁部内外面に沈線を重ねる。56は深鉢の波状口縁の突起部分で中期末と考えられる。口縁部外面には側辺に沿う沈線があり、沈線間にU字状沈線によるモチーフを加える。この沈線間に生じた3条の隆帯上には半裁竹管で刺突文が加えられる。なお、突起上の端面はやや広い面をもち、沈線が加えられる。体部は沈線で区画された内部に縄文が充填される。

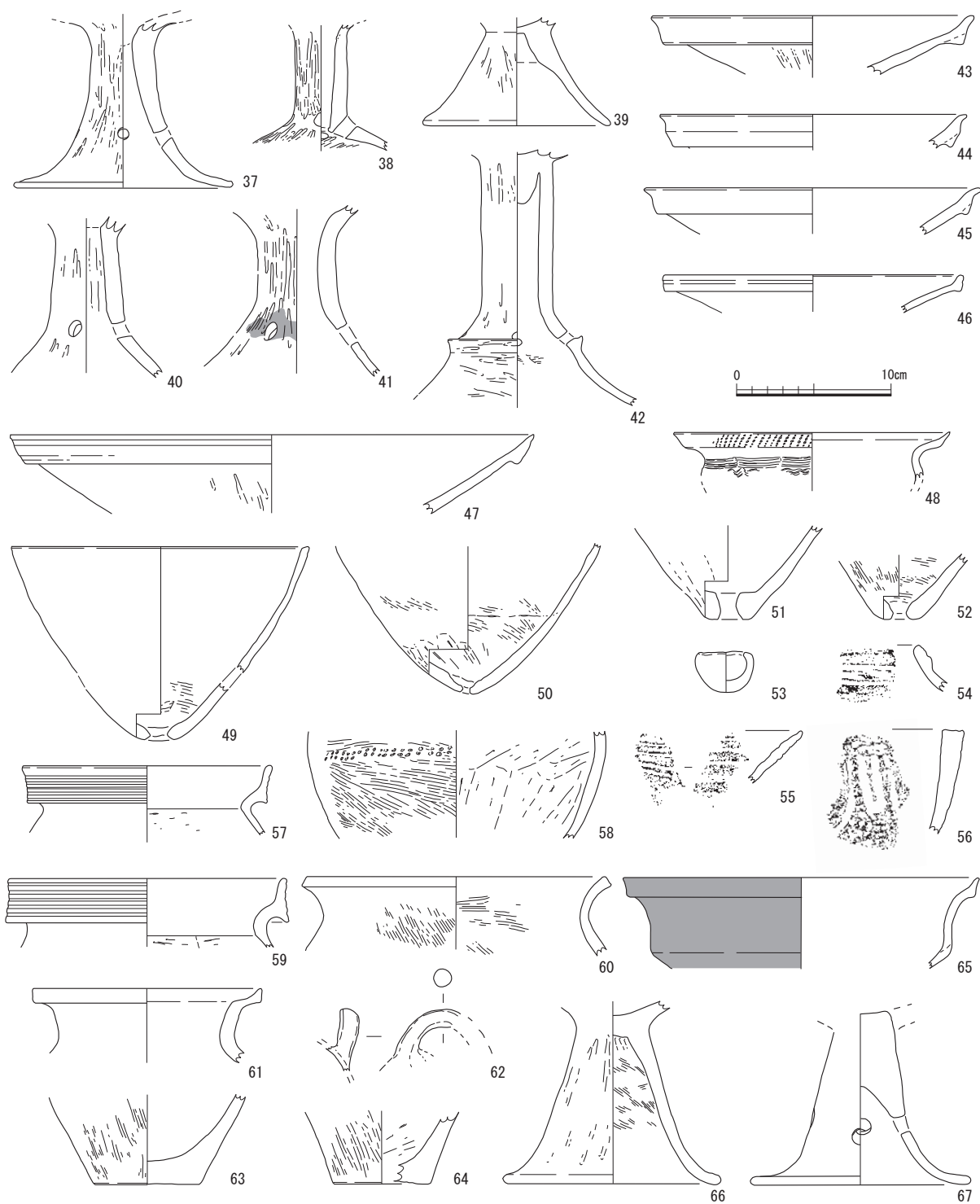
59～67は遺構外出土品である。65は鉢形の杯部をもつ高杯で、外面全体に赤彩を施す。62は小型の壺の半環状の把手で、胴部とは貫通させた後にナデ調整で接合する。63は壺、64は壺か甕の底部である。径が比較的大きく厚手で、中期後葉まで遡る可能性がある。

本調査区で出土した弥生土器は後期後葉を主体とするが、僅かに前後の時期のものを含んでいる。甕の組成は無文有段口縁甕と擬凹線文有段口縁甕、広義の近江系と評価する受口状口縁甕の三者で主体を構成する。北陸地方に通有な前二者に加え、後者が一定量認められる状況は、従来から大野盆地の特徴と考えられてきたが、今回の調査でもこれを追認できた。

また、特徴的な出土品として、33・34・65のような鉢形の杯部をもつ高杯がある。形態は口縁部が有段となるが短小で、頸部のくびれは弱くほとんどすばまらない結果、杯部の容量は大きくなっている。こうした形状には広義の近江系である受口状口縁の鉢からの影響が窺え、中には赤彩が認められる資料もある。福井平野を始めとする当概期の北陸南西部地域にも鉢形の杯部をもつ高杯は存在するが、それらは発達した有段口縁をもち、頸部以下に皿状の小さな杯部が付く点で異なっている。従来は、これらの高杯が希薄であることも大野盆地の特徴とされてきたが、今回出土したものと同様の土器は、太田・小矢戸遺跡から大野盆地東部を北流する赤根川を約5km遡った位置に存在する同市域の右近次郎西川遺跡でも出土している（県埋文2002の第8図23）。今後の資料の増加次第では、大野盆地西部に主体的に認められる高杯として設定できる可能性がある。



第16図 縄文・弥生土器 1 (縮尺1/4)



第17図 縄文・弥生土器2 (縮尺1/4)

参考文献

杉山拓己 2012 「福井県嶺北地域の土器様相」『古墳出現期土器研究』第1号

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『右近次郎西川遺跡』

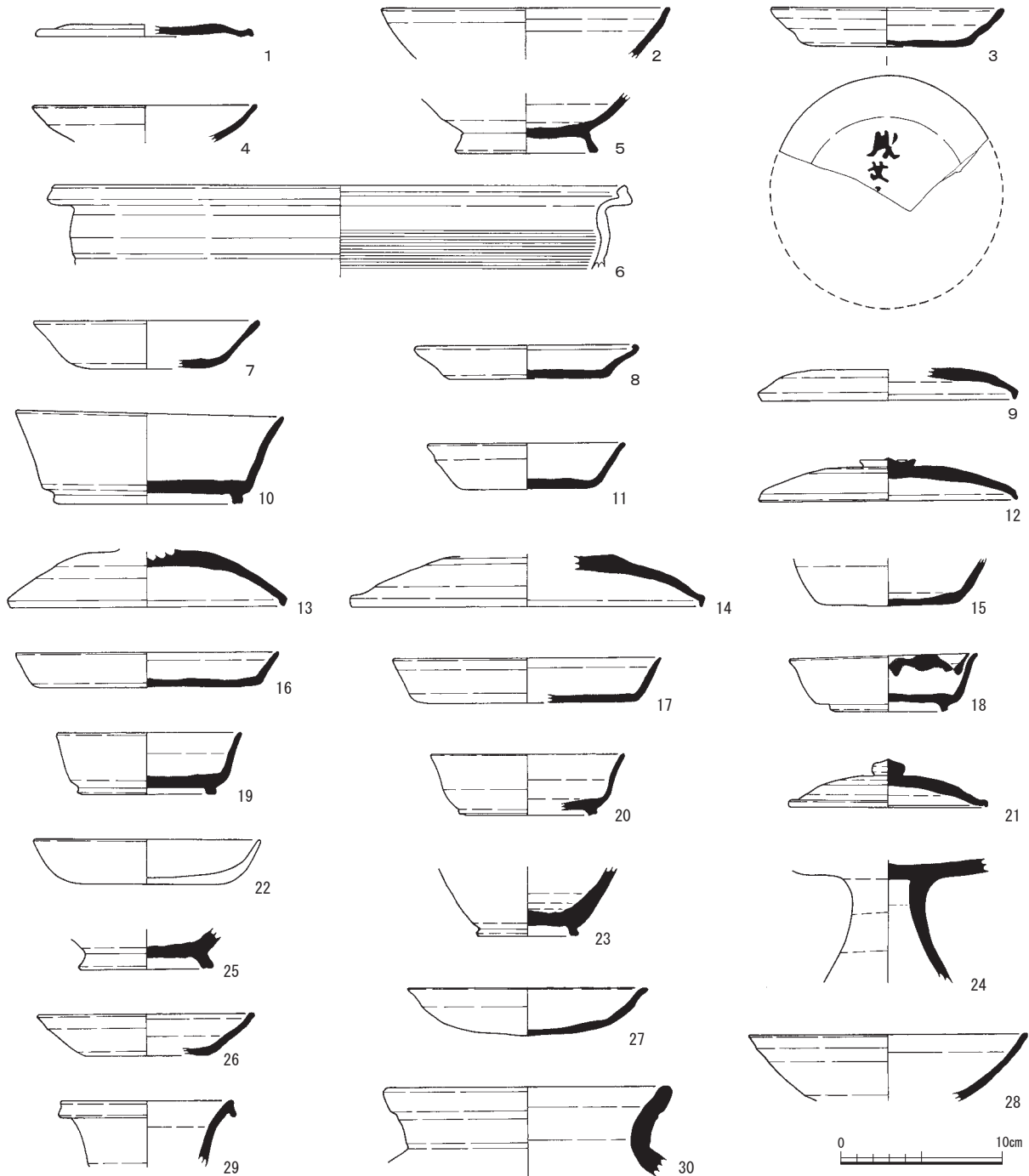
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『中丁遺跡』

2 古代の土器（第18～21図）

本調査区から出土した古代の土器には、須恵器、土師器、灰釉土器がある。出土地点により遺構出土品、旧河道（SR01）出土品、包含層出土品に区分して報告を行う。なお、須恵器が大半を占めるため、報告文中では土師器・灰釉土器のみ器種名の前に種別を冠することとする。

遺構出土の土器（第18図）

SP374からは坏蓋（1）、埴B（2・4・5）、坏A（3）、土師器鍋（6）が一括で出土している。3の底面には「成女」の墨書が確認できる。いずれも8世紀後葉～9世紀前葉に属する。SP375からは坏A（7・8）が出土している。8は口縁端部がわずかに内面に折り返されており、焼台のような形状



第18図 古代の土器 1（縮尺1/4）

である。SP374と同時期に属する。SP283からは平笠タイプの坏蓋（9）、SP353からは坏B（10）が出土している。10は高台が方形で踏ん張りはなく、口縁部がやや緩やかに外反する。ともに8世紀後半に属する。

SE05からは坏A（11）が出土している。小型で口縁の立ち上がりは緩く8世紀後半に属する。井戸自体は中世の遺構であり混入品である。

土坑からはまとまった量の土器が出土している。SK13からは坏蓋（12～14）が出土している。平笠・山笠タイプの天井部をもつ。いずれも8世紀後半に属する。SK15からは坏A（15）、皿（16・17）、坏B（18）が出土している。18の内面には墨が付着する。SK13と同時期に属する。SK16からは坏B（19・20）、坏蓋（21）、土師器坏A（22）が出土している。22は内外面とも赤彩され、ミガキ調整が施されているが、器壁は風化で剥離が激しい。22にやや古い様相の調整を確認できるが、8世紀後半に属する。

SD02からは埴B（23）が出土している。底部外面には糸切り痕が残る。9世紀中葉に属する。SD04からは高坏（24）が出土している。低脚で、裾広がりの器形である。

掘立柱建物の柱穴からも一定量の土器が出土している。SB03のP05からは坏A（26）、P04からも坏A（27）と埴B（25）が出土している。26・27とも口縁が大きく開いている。27は底部が平坦ではなく、不整形な丸みもつ。このほかP02からは埴B（28）、P06からは口縁端部が折り返された長頸壺（29）が出土している。時期差はなく、いずれも8世紀後葉～9世紀前葉の時期に属する。SB04のP05からは広口壺（30）が出土している。焼成が不良で、土師器のような色合いを呈する。

SR01出土の土器（第19・20図）

SR01からは多くの土器が出土しているため個別に報告を行う。まず供膳具などの小型器種について報告を行う（第19図）。

31～37、39～43は坏Aである。器高が高く、口縁が直立気味の31や34にはやや古い様相が窺える。32の口縁部には内外面ともに幅1cm未満の範囲で煤が付着する。40～42の底面には墨書が確認でき、40は2文字認める。下の文字はおんな偏の可能性もあるが、判然としない。41は門ないし南の構えの文字と推測できる。42は「飯」である。

38は埴Aである。8世紀半ば～後半に少量生産される製品である。

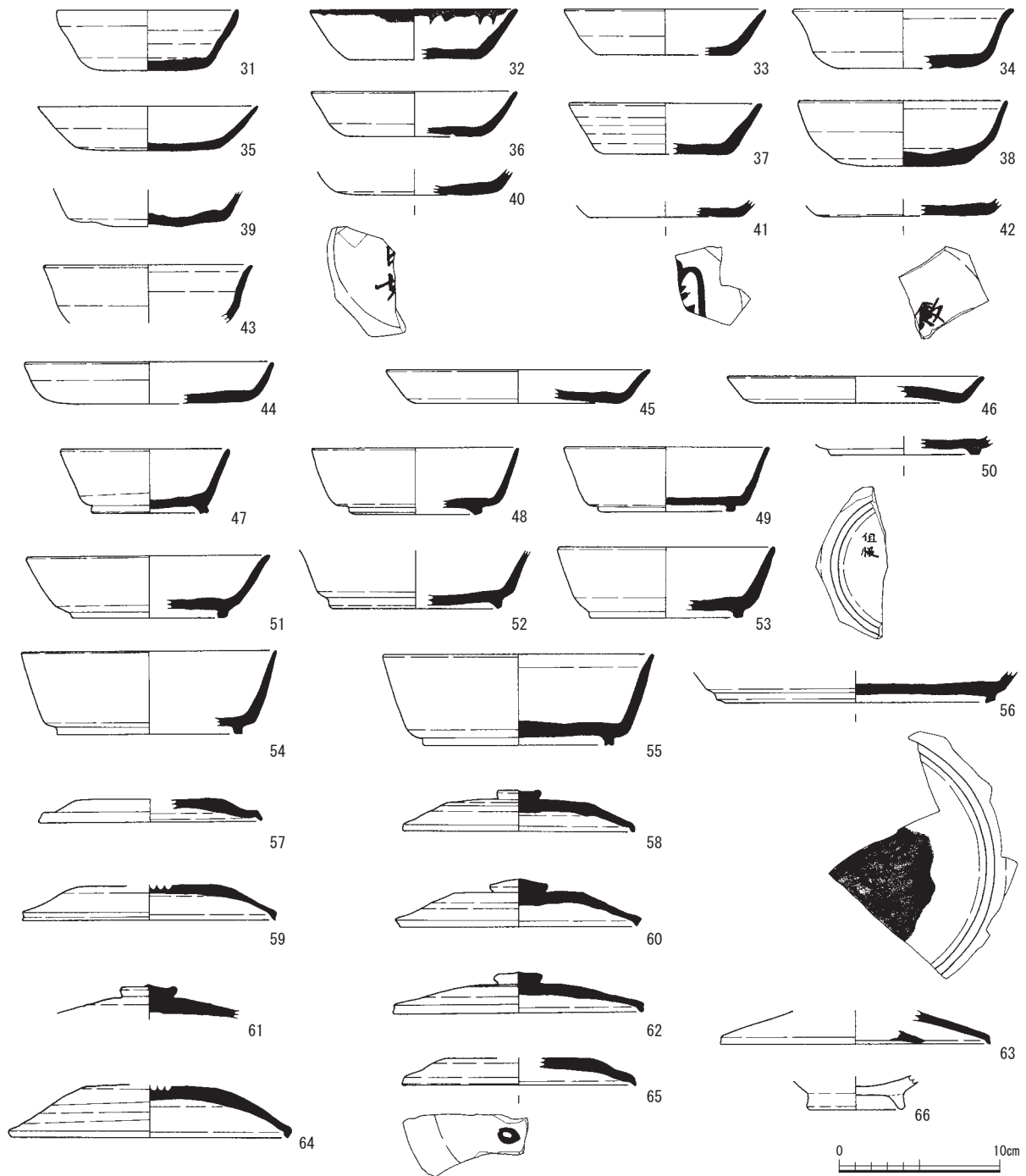
44～46は皿である。44のみ、口縁が直立気味でやや古い。

47～56は坏Bである。47・55のように高台が踏ん張る形で、やや古い様相が窺えるものも含まれる。大半は高台が方形か台形で、口縁が緩やかに外反する。50の底面には「但領カ」の墨書が確認できる。また、56は本調査区出土品の中では最も大型で、底部外面を海として利用した転用硯である。底部中央には墨の痕跡がよく残っている。口縁部破損後の再利用かどうかは判然としない。

57～65は坏蓋である。扁平タイプ（57・65）、平笠タイプ（58～60）、山笠タイプ（61～64）と全てのタイプが出土している。つまみは扁平なものが多く、擬宝珠形は少ない。65の天井部には、「○」記号の墨書が確認できる。

66は土師器の埴Bである。底径は小さく、断面が細長い台形の高台がつく。9世紀前半に属するものと推定できる。

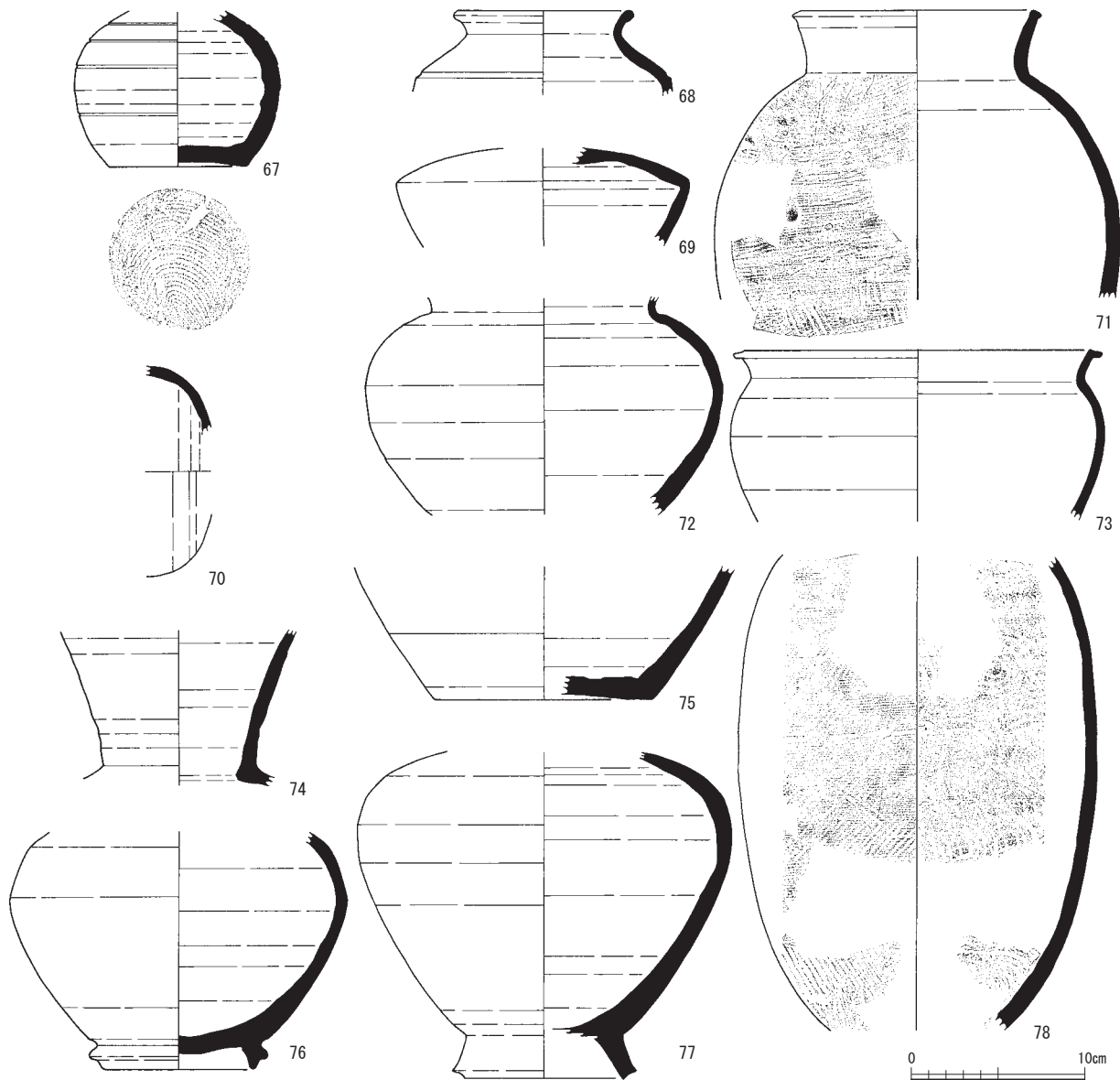
次に壺・甕について報告を行う（第20図）。67は小型の長頸瓶の胴部である。底部は平底で、胴部には4条の凹線が施される。68は短頸壺である。口縁部は外反し、直立しない。肩部には太い凹線が巡る。69は長頸瓶の胴部である。肩部が鋭く張り出したいわゆる平瓶である。70は横瓶である。円盤状の粘



第19図 古代の土器 2 (縮尺1/4)

土を用いて閉塞している痕跡がある。71は中型の甕である。口縁部は短く外折する。72は短頸壺の胴部である。肩が張った器形で直立する口縁がつくものと推定できる。73は広口鉢である。外折する口縁部は胴部最大径とほぼ同じ口径である。74は長頸瓶の頸部である。大型で耳付瓶とも推定できるが、詳細は不明である。76は脚付の短頸壺である。胴部中位が最大径となり、あまり肩が張らない。77は脚付の長頸瓶である。78は土師器長胴甕の胴部である。完全に須恵質化している。外面の胴部上半は、タタキ後にカキメ調整が施される。内面はカキメ範囲のタタキ目がナデ消されている。

壺・甕類の所属時期については、69がやや古い時期に属するものと推定できるが、大半の製品は概ね8世紀後半に属する。



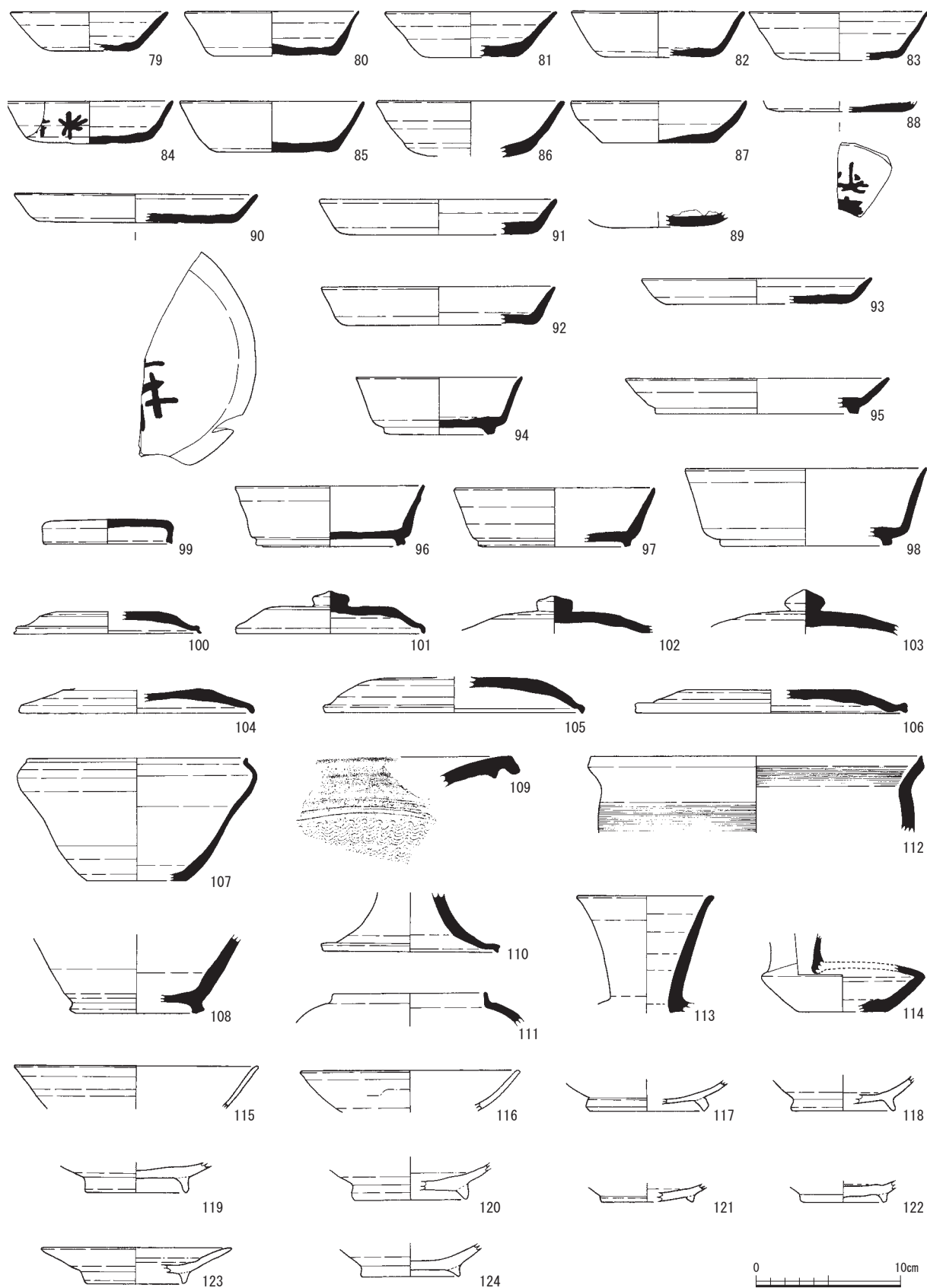
第20図 古代の土器 3 (縮尺1/4)

包含層出土の土器 (第21図)

包含層からも、これまでの報告と同器種の須恵器が多く出土している。ここでは主に特徴的なものやこれまでの報告では確認できなかった器種について報告を行う。

坏A (84・88) には墨書が確認でき、ともに2文字認める。判読できないが、最初の文字は同じ文字と思われる。皿 (90) にも墨書が確認できる。「庄カ」と推定できるが欠損で断定できない。坏A (89) の見込みには、漆状の物質が付着している。99は壺蓋である。つまみはなく天上部は平坦である。坏蓋 (101) の内面には墨痕がある。転用硯として利用されていたものである。また、坏蓋 (102) の内面には「×」のヘラ記号が確認できる。107は鉄鉢である。平底で、口縁部は上方に摘み上げられる。114は平瓶である。明らかにこれまでの出土品とは異なり時期が古い。

115～123は灰釉陶器である。埴 (115～120) と皿 (121～123) が確認できる。かせているため、釉の付着が判然としないものもある。高台は、いわゆる三日月高台で、黒笹90号窯段階以降の製品と考えられる。



第21図 古代の土器4 (縮尺1/4)

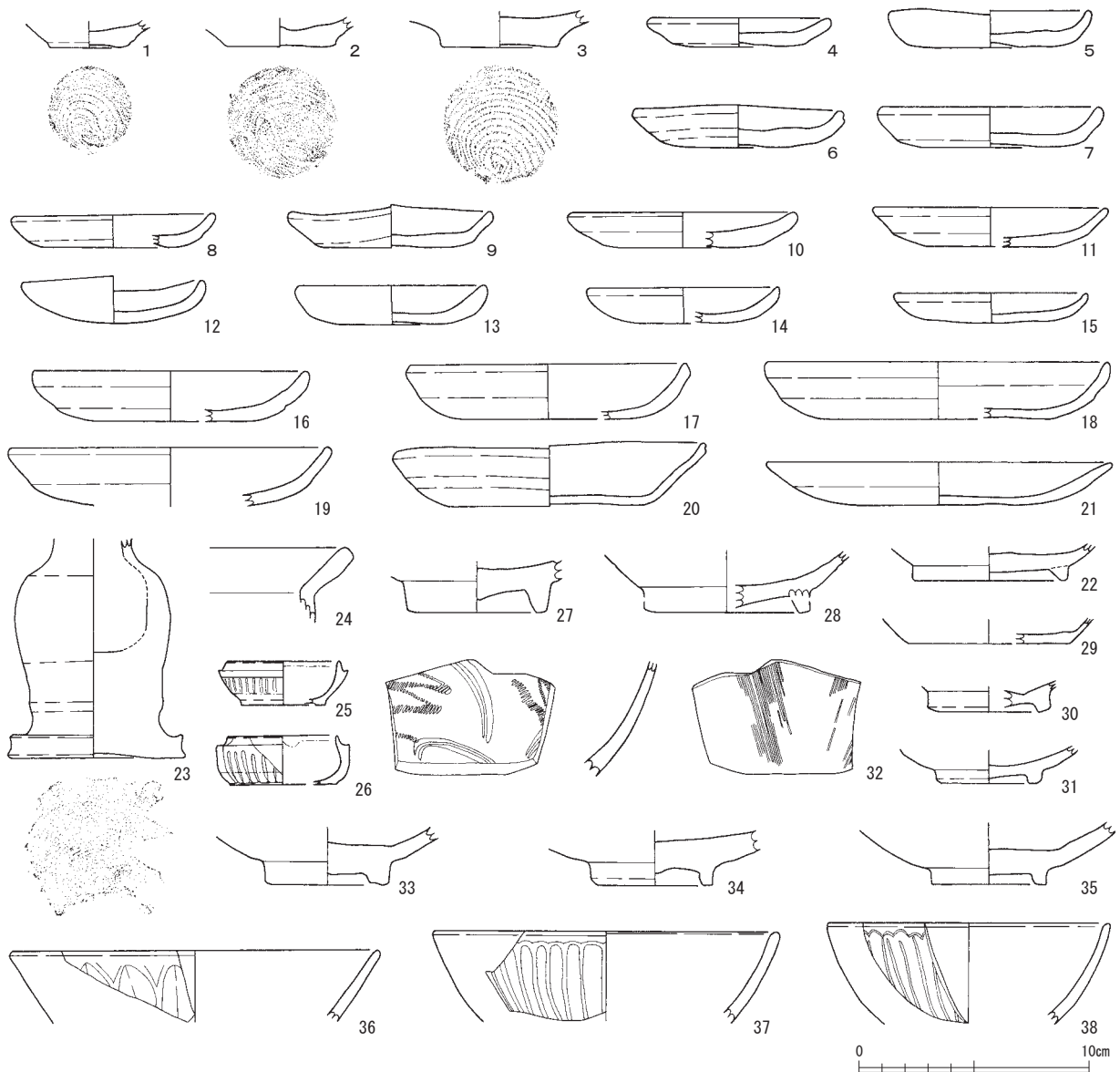
124は土師器碗である。内面は黒色化している。残存部位は少ないが、底径は小さく、黒色土器A類と推定できる。

3 中世の土器・陶磁器（第22・23図）

土師質土器と輸入陶磁器、焼き締め陶器などが出土している。本項では遺構出土品を主に扱うが、特徴的な遺物に限り包含層出土品も図化した。ただ、出土量が少ないため、器種ごとに報告する。

土師質皿には回転台成形のR種と手づくね成形のT種があり、出土品の多くは後者に属する。本項では、SD02出土品を中心とする土師質皿を、口径7～9cm台を測る小皿と10cm台以上の大皿に大別し、器形による分類に基づき、口縁部の調整で細別した。4～11は強い横ナデのため体部外面に稜を持つ。口縁部の面取りが明瞭な4～7と不明瞭な8～11があり、6の端部には沈線が巡る。12～15は底部から緩やかに立ち上がり、口縁部を面取りする。小皿同様、SE03出土の21を除く大皿の器形も2種に大別できる。口縁部は全て面取りし、20の端部には沈線が巡る。15世紀後半頃のSE03出土品を除く土師質皿は、13世紀後半が中心と判断する。なお、22は山茶碗で、高台外面に糸切り痕と刳殻痕を認める。

23は瀬戸の仏華瓶を模倣した土師質の花瓶で、器壁の厚い底部外面に糸切り痕を認める。24は土師質の鍋で、屈曲する頸部外面を押圧成形し、口縁部内面に横位のハケメ調整を施す。県内の中世前半頃の

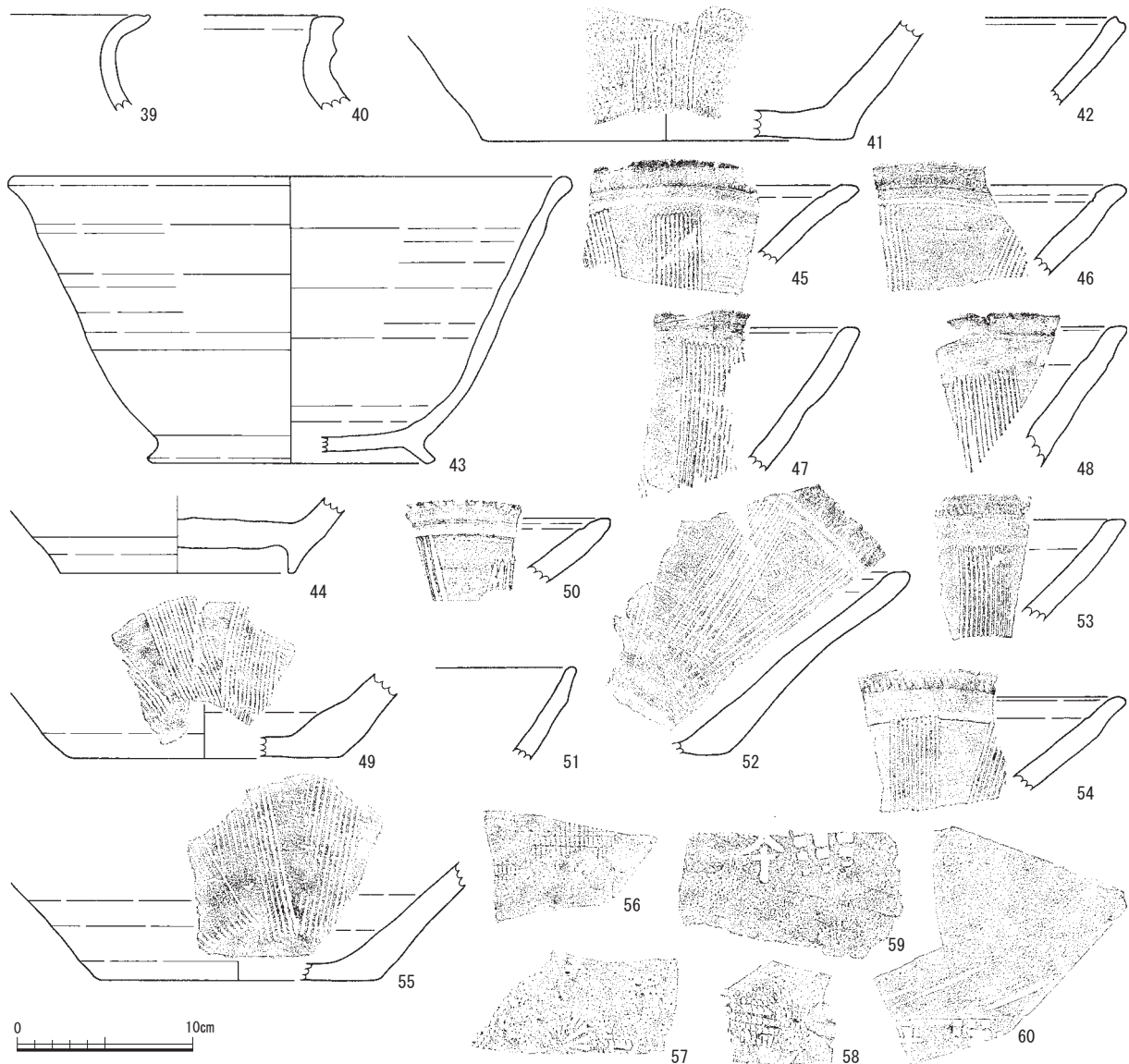


第22図 中世の土器・陶磁器 1（縮尺1/3）

遺跡で散見するもので、鉄鍋の模倣品であろう。

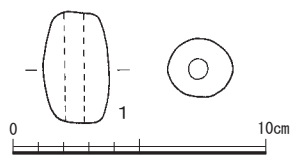
輸入陶磁器には青白磁と青磁と白磁があり、多くを碗類で占める。一定量出土したが、良好な資料は少ない。25・26は青白磁の平型合子で、体部に型造りの菊座を持つ。27・28は白磁碗で、後者は見込みの釉を輪状に剥ぐ。29は全面施釉の白磁皿で、口縁部は口禿と思われる。33～35は龍泉窯系の青磁碗で、器壁の厚い底部に四角形の低い高台がつく。32は同安窯系の青磁碗で、体部外面に櫛目文、内面に片切り彫りで劃花文を描出する。36～38の青磁碗の内、36は鎬蓮弁文、後2者は細線と剣頭から成る蓮弁文を体部外面に描出する。

焼き締め陶器には常滑焼と越前焼がある。39・56は常滑焼で、弓状に外反する頸部をへて端部を薄く摘み上げる口縁部に至る。なお、56には格子状の押印文を施す。40・41、57～60は越前焼の甕で、41は内面に4条線から成る刻文と布状の付着物を認める。後4者の体部片には車輪文と格子文、凹の本、凹の大と格子文から成る押印文を施す。鉢類には遺構出土品が定量ある。SD02出土の43とSR02出土の42・44は播目を施さない13世紀代の片口鉢で、付高台をもつ底部から体部外面の下半部に回転ヘラ削りを施す。45～50と52～55は播鉢で、SE08出土の53は口縁部が方形で、54は丸みを帯びる。SE05出土



第23図 中世の土器・陶磁器 2 (縮尺1/4)

の50・52は口縁部が三角形に近く、SR02出土の46～49はSE08出土品と同型式である。これらは15世紀後半～16世紀代に位置付けられる。



第24図 土製品(縮尺1/3)

4 土製品 (第24図)

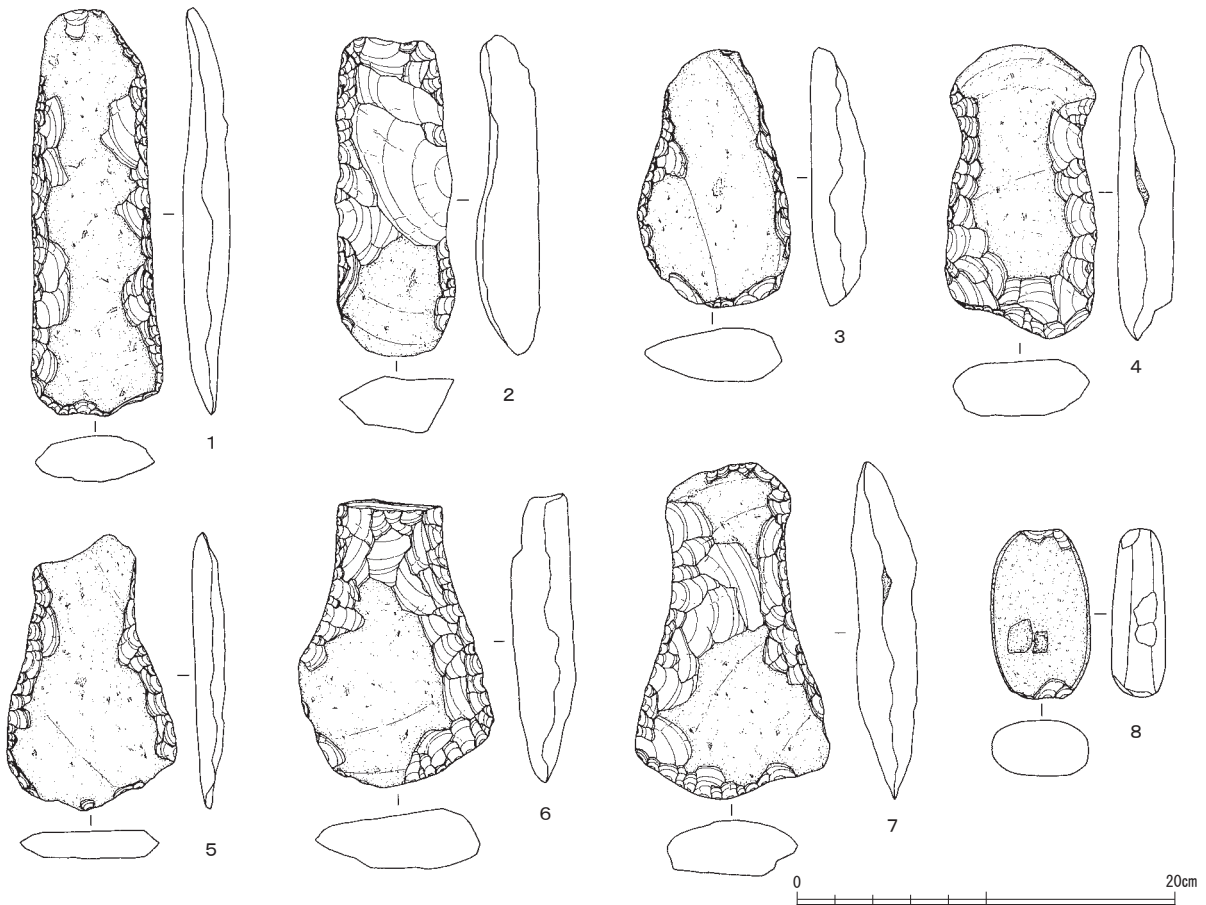
土製品は、器体中央に孔をもつ土師質の管状土鍾が1点のみ出土した。形態は長細く側面が洋樽形を呈し、長さ4.4cm、幅2.8cm、重さ23.2gを測る。

5 石器 (第25図)

打製石斧15点と石鍾1点の計16点が出土し、石質は全て安山岩である。全体の7割弱がF19・20のSR02にまとめられ、ほかでは散在する。

打製石斧(1～7) 多くは板状剥片が素材で、周辺中心に調整される。1と2は、基部から刃部がほぼ同じ幅で、短冊形を呈す。1は薄手の長身で、基部がすぼまる。3は、基部から刃部へ側辺が開き、撥形を呈す。側辺下半が湾曲して丸い刃部をもつ。4～7は、側辺中程のやや上位に抉入をもち、分銅形を呈す。4は、基部から刃部へ側辺が緩く開き、刃部左半が内湾する。5～7は、側辺下半が湾曲し、幅広の刃部をもつ。5は薄手で、基端が内湾する。6と7は、刃部境が屈曲する。

石鍾(8) 打欠石鍾で、やや細長の扁平な楕円礫が素材。表裏の上下端に数回調整される。



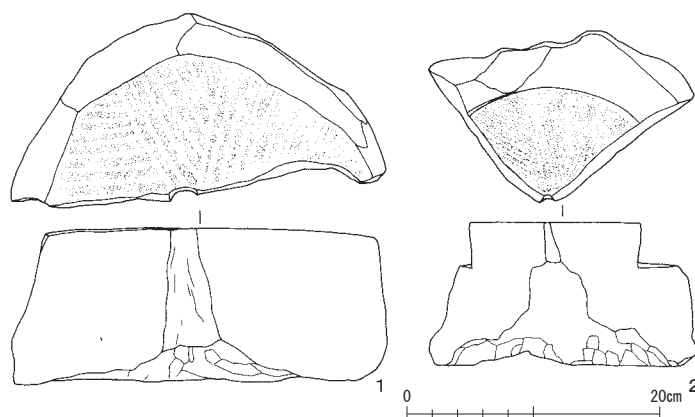
第25図 石器(縮尺1/4)

6 石製品（第26図）

粉挽臼下臼、茶臼の身部と台部で、計3点出土した。石質は第12表に示す。

粉挽臼（1） 下臼。臼目は6分画だが、等分に区画されていない。副溝は6～9条で、臼面は緩くふくみをもたせる。下面は丸ノミで整形されえぐりをもつ。

茶臼（2） 小和清水産の台部。受け皿は円滑に仕上げられ、芯棒孔と下面はノミで整形され大きくえぐりをもつ。臼目は8分画で副溝を14条程もつ。

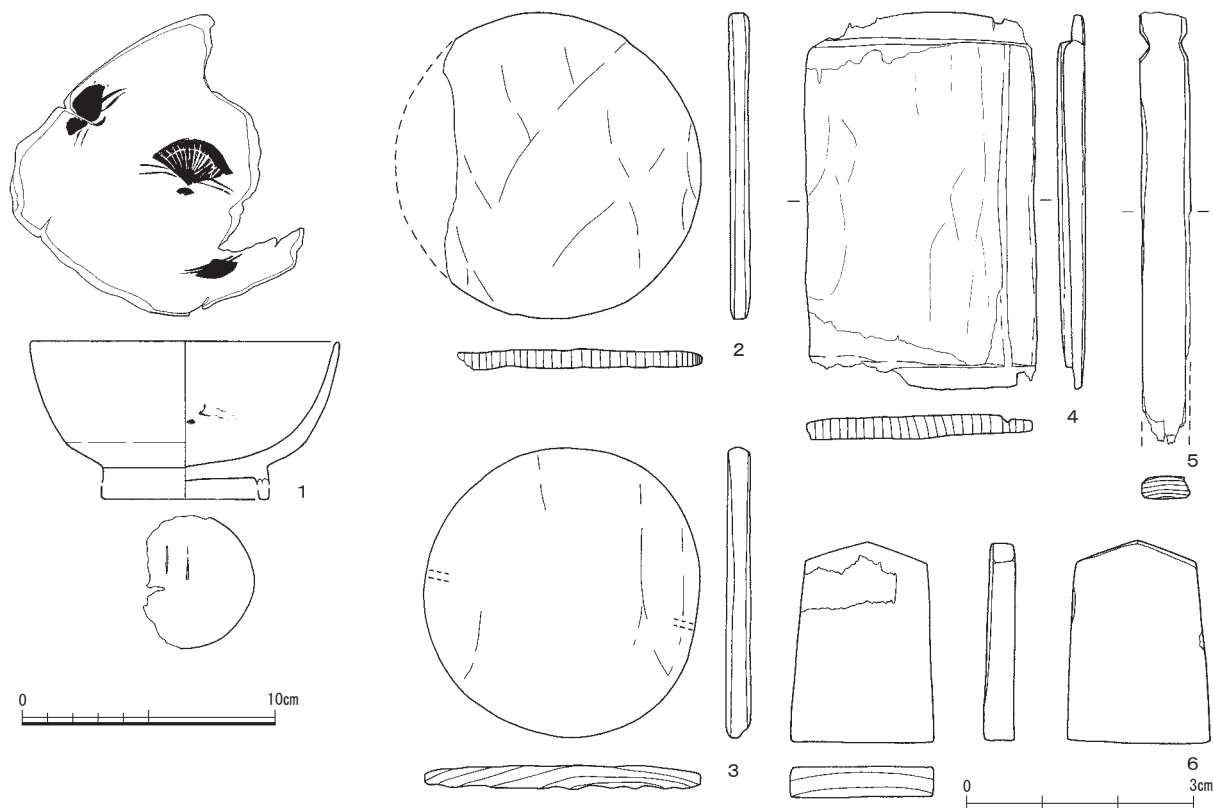


第26図 石製品(縮尺1/6)

7 木製品（第27図）

出土量は僅かで遺存状態も良好な資料は少ない。出土箇所はSE08・10、SK18、SR01で、前3者からの出土品は共伴する遺物から中世と判断できる。供膳具と容器および遊戯具で構成する。

1はSE08出土の漆器碗で、黒漆を塗布した内外面に朱描を認める。外面の文様は遺存状況が悪く不明だが、内面には檜扇を見込み中央と周辺の3箇所に配する。2・3は容器の底板で、円形を呈する。4は箱型容器の側板で、上下端部に5mm程の切り込みを認める。5は木札で、厚さ9mmを測る。墨書は認めないものの、水平な上部の下位の左右を切り込む。6はSK18出土の将棋の駒である。文字の消失のため駒種は不明だが、表面は駒尻から駒先に向け僅かに下る。土師質の花瓶とともに出土した。



第27図 木製品(1～5：縮尺1/3, 6：縮尺1/1)

第4章 遺構・遺物

第6表 縄文土器観察表

凡例 胎土分類は1～4は、例言13による。

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	口径	底径	器高	調整/施文		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	外面	内面			
17 54	F19 SR03	鉢				口：ナデ、	口：ナデ	黄橙色	灰黄褐色	3	不良	
17 55	F18 SR03	深鉢				口：ナデ、沈線文	口：ナデ、沈線文	褐色	橙色	1	不良	
17 56	F20 SR03	深鉢				口：ナデ、沈線、U字状沈線、	口：ナデ	黄橙色	黄褐色	3	不良	

第7表 弥生土器観察表

凡例 胎土分類は1～4は、例言13による。

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	口径	底径	器高	調整/施文		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	外面	内面			
16 1	F25 SD01	甕	19.8			口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ	黄褐色	橙色	3	良	
16 2	F25 SD01	甕	10.0			口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ	黄褐色	黄褐色	1	良	
16 3	F24 SD01	壺	23.6			口：ハケメ、口端：ヨコナデ	口：ハケメのちヨコナデ	橙色	浅黄橙	1	良	
16 4	F18 SR03	甕	15.8			口：ハケメのち口端：ヨコナデ	口：ハケメのち口端：ヨコナデ	黄褐色	黄灰色	4	良	
16 5	F20 SR03	甕	16.2			口：ヨコナデ、擬凹線文(1) 体：ナデ、列点文	口：ヨコナデ、体：ナデ	黄褐色	灰白色	1	良	
16 6	F20 SR03	甕	16.0			口：ヨコナデ、列点文	口：ヨコナデ	灰黄色	灰黄色	3	良	
16 7	F20 SR03	甕	21.8			口：ヨコナデ、列点文	口：ヨコナデ	黄褐色	黄褐色	3	良	
16 8	F21 SR03	甕	25.8			口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデのちミガキ	灰黄色	灰黄色	3	良	
16 9	F20 SR03	甕	27.2			口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	4	良	
16 10	F18 SR03	甕	18.6			口：ヨコナデ	口：ヨコナデ、体：ケズリ	黄褐色	黄褐色	3	不良	
16 11	F20 SR03	甕	7.0	2.0	8.3	口：ヨコナデ、体：ナデ、底：ナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ	黄褐色	浅黄褐色	1	良	ミニチュア品、胎土精良
16 12	F20 SR03	甕	15.2			口：ヨコナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ	黄褐色	黄褐色	4	良	煤
16 13	F20 SR03	甕	14.8			口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ナデ、ハケメ	灰黄褐色	黄褐色	3	良	
16 14	F18 SR03	甕	18.2			口：ヨコナデ、擬凹線文(6)、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ケズリ	明赤褐色	明赤褐色	3	良	煤
16 15	F20 SR03	甕	20.0			口：ヨコナデ、擬凹線文(4)	口：ハケメのちヨコナデ、体：ケズリ	黄褐色	明黄褐色	1	良	
16 16	F21 SR03	甕	18.4			口：ヨコナデ、擬凹線文(4)	口：ヨコナデ、体：ケズリ	灰白色	灰白色	1	不良	
16 17	F19 SR03	甕	20.2			口：ヨコナデ、擬凹線文(13)	口：ヨコナデ、指圧痕、頸：ケズリ	灰色	灰黄色	3	良	
16 18	F19 SR03	壺	13.0			口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ	灰白色	灰白色	4	良	口縁に直線状の沈線
16 19	F20 SR03	壺	12.2			口：ヨコナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ	浅黄色	浅黄色	3	良	
16 20	F19 SR03	壺				体：ミガキ、突帯、櫛描直線文	体：ナデ	灰黄色	黄灰色	1	良	
16 21	F20 SR03	壺	16.8			口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	灰白色	灰白色	3	良	
16 22	F19 SR03	壺	23.6			口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ	明赤褐色	橙色	3	良	
16 23	F20 SR03	壺	19.4			口：ヨコナデ、刻文	口：ヨコナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	4	良	
16 24	F20 SR03	壺	16.4			口：ヨコナデのちミガキ	口：ヨコナデのちミガキ、体：ケズリ	浅黄褐色	橙色	1	良	胎土精良
16 25	F18 SR03	壺	13.8			口：ヨコナデ、擬凹線文(4)、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
16 26	F20 SR03	壺	8.0			口：ヨコナデのちミガキ	口：ヨコナデのちミガキ	浅黄褐色	浅黄褐色	1	良	外面に赤彩
16 27	F20 SR03	壺				頸：ミガキ、体：ハケメのちミガキ	頸：ナデ、体：ナデ	赤色	灰白色	1	良	外面に赤彩
16 28	F20 SR03	無頸壺	8.4			口：ヨコナデ、体：ミガキ	口：ヨコナデ、体：ナデ	黄褐色	黄褐色	4	良	外面に赤彩
16 29	F20 SR03	高杯	27.8			口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	浅黄褐色	浅黄褐色	1	良	
16 30	F19 SR03	高杯	27.0			口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	灰白色	灰白色	3	良	
16 31	F20 SR03	高杯	22.4			口：ミガキ、体：ミガキ	口：ミガキ、体：ミガキ	浅黄褐色	浅黄褐色	1	良	
16 32	F20 SR03	高杯	28.0			口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	黄褐色	黄褐色	1	良	
16 33	F20 SR03	高杯	23.0			口：ヨコナデ、体：ミガキ	口：ヨコナデのちミガキ、 体：ケズリのちミガキ	橙色	浅黄色	3	良	
16 34	F20 SR03	高杯	20.8			口：ヨコナデ、体：ミガキ	口：ヨコナデ、体：ミガキ	灰白色	灰白色	3	良	
16 35	F21 SR03	高杯				脚：ナデ、列点文、ヘラ描直線文	脚：ナデ、体：ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
16 36	F20 SR03	高杯		12.6		脚裾：ミガキ、脚端ヨコナデ	脚裾：ミガキ、脚端ヨコナデ	黄褐色	黄褐色	1	良	
16 37	F20 SR03	高杯		13.8		脚：ミガキ、脚裾：ヨコナデのちミガキ	脚：ナデ、脚裾：ヨコナデ	橙色	明赤褐色	3	良	円盤充填の痕跡
16 38	F21 SR03	高杯				脚：ハケメのちミガキ	脚：ナデ、脚裾：ミガキ	灰黄色	灰黄色	4	良	円孔4方向
16 39	F20 SR03	高杯		11.8		脚：ミガキ、脚端：ヨコナデ	脚：ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
16 40	F20 SR03	高杯				脚：ミガキ	脚：ナデ	橙色	橙色	1	不良	円孔3方向
16 41	F21 SR03	器台				脚：ミガキ	脚：ナデ	灰黄色	浅黄色	3	良	円孔3方向、赤彩
16 42	F20 SR03	高杯				脚：ミガキ	脚：ナデ、脚裾：ハケメのちナデ、 体：ミガキ	灰白色	灰白色	1	良	円孔4方向
16 43	F20 SR03	器台	20.8			口：ヨコナデ、体：ミガキ	口：ヨコナデ、体：ミガキ	浅黄褐色	灰白色	4	良	
16 44	F20 SR03	器台	19.8			口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	3	良	
16 45	F20 SR03	器台	21.6			口：ヨコナデ、体：ミガキ	口：ヨコナデのちミガキ	浅黄褐色	浅黄褐色	3	良	
16 46	F18 SR03	器台	19.4			口：ヨコナデのちミガキ	口：ヨコナデのちミガキ	橙色	橙色	3	不良	
16 47	F20 SR03	鉢	34.2			口：ヨコナデ、体：ミガキ	口：ミガキ	浅黄褐色	浅黄褐色	3	良	
16 48	F20 SR03	鉢	18.0			口：ヨコナデ、櫛描列点文 体：ナデ、櫛描波状文、直線文	口：ヨコナデ、体：ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
16 49	F20 SR03	有孔鉢	19.4			口：ナデ、体：ナデ、底：ナデ	体：ハケメのちナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	1	良	
16 50	F20 SR03	有孔鉢				体：ハケメのちナデ、底：ケズリ	体：ハケメのちナデ	灰白色	浅黄褐色	3	良	
16 51	F21 SR03	有孔鉢				体：ナデ	体：ナデ	浅黄褐色	淡黄色	4	良	
16 52	F19 SR03	有孔鉢				体：ハケメ、底：ナデ	体：ハケメ	黄灰色	黄灰色	1	良	
16 53	F19 SR03	鉢	3.0			口：ナデ、体：ナデ	体：ナデ	明赤褐色	明赤褐色	3	良	
16 57	F20 SD18	甕	16.0			口：ヨコナデ、擬凹線文(5)	口：ヨコナデ、体：ケズリ	黄褐色	灰黄褐色	3	良	
16 58	F14 SD17	甕				体：ハケメ、刺突文	体：ケズリ	灰黄褐色	灰黄褐色	4	良	煤・焦げ
16 59	F19・20 側溝	甕				口：ヨコナデ、擬凹線文(5)	口：ヨコナデ、体：ケズリ	黄褐色	黄褐色	3	良	
16 60	F13 包含層	壺	19.4			口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ハケメのちヨコナデ、体：ハケメ	黄褐色	黄褐色	1	良	
16 61	F19・20 側溝	壺	15.0			口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	灰白色	灰黄色	4	良	
16 62	F14 側溝	壺				把手：ナデ	体：ナデ	橙色	橙色	3	良	
16 63	F14 側溝	壺		6.8		体：ハケメ、底：ナデ	体：ナデ	明赤褐色	明赤褐色	1	良	
16 64	F15 側溝	壺		6.4		体：ハケメ、底：ナデ	体：ケズリ	黄褐色	浅黄褐色	3	良	
16 65	F20 包含層	高杯	23.0			口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	口：ヨコナデのちミガキ、体：ミガキ	赤褐色	浅黄褐色	3	良	外面に赤彩
16 66	F19・20 側溝	高杯		13.6		脚：ミガキ、脚端：ヨコナデ、体：ミガキ	脚：ハケメ、脚裾：ヨコナデ、脚端：ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	1	良	
16 67	F19・20 側溝	高杯		13.8		脚：ミガキ、脚端：ヨコナデ	脚：ナデ、体：ミガキ	浅黄褐色	浅黄褐色	3	良	円孔4方向

第2節 遺物

第8表 古代の土器観察表

凡例 器種名は、須恵器→須、土師器→土、灰軸土器→灰、黒色土器→黒と記した。なお、胎土分類の1～4は、例言13による。

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	口径	底径	器高	調整/施文		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	外面	内面			
18 1	F4 SP374	須 坏蓋	13.4			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
18 2	F4 SP374	須 埴B	17.8			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰色	灰色	4	良	
18 3	F4 SP374	須 坏A	14.2	9.0	2.4	口～底:回転ナデ、ナデ、ス/ノ痕	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	3	良	墨書
18 4	F4 SP374	須 埴B	15.8			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰色	灰色	4	良	
18 5	F4 SP374	須 埴B		8.8		体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	
18 6	F4 SP374	土 鍋	37.4			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ、カキメ	浅黄褐色	黄褐色	1	良	
18 7	F4 SP375	須 坏A	14.0	9.4	3.0	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	不良	
18 8	F4 SP375	須 坏A	13.6	9.2	2.1	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	1	良	
18 9	F8 SP283	須 坏蓋	15.8			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	黄灰色	黄灰色	3	良	
18 10	F8 SP353	須 坏B	16.6	11.6	5.8	口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ 底:ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	黄灰色	3	良	
18 11	F20 トレンチ F22 SE05	須 坏A	12.2	7.0	2.9	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	1	良	
18 12	F8 SK13	須 坏蓋	16.0			口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ、ナデ	灰色	灰白色	1	良	
18 13	F8 SK13 SK15 SP283 F8 包	須 坏蓋	17.0			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	4	良	
18 14	F8・9 SR01 F8 SK13 SP283 F8 包	須 坏蓋	21.8			口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	1	良	
18 15	F8 SK15	須 坏A		7.4		体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	3	不良	
18 16	F8・9 SR01 F8 SK15 F8 SK16 P14	須 皿	16.4	14.2	2.3	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	4	良	
18 17	F8 SK15	須 皿	16.8	13.8	2.8	口～体:回転ナデ、	口～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
18 18	F8 SK15 F8 包	須 坏B	11.6	6.8	3.5	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	口縁内面に煤
18 19	F8 SK16 P5 P7	須 坏B	11.4	8.3	3.9	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	4	良	
18 20	F8 SK16 P14	須 坏B	12.0	7.8	3.8	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	3	良	
18 21	F8 SK16 P6 P12	須 坏蓋	12.2		3.0	口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	
18 22	F8 SR01 F8 SK16 P8	土 坏A	14.0	9.0	2.1	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	橙色	橙色	1	不良	内外面に赤彩
18 23	F18 SD02	須 埴B		5.4		体～底:回転ナデ、回転糸切り	体～底:回転ナデ	黄灰色	灰白色	3	良	
18 24	F17 SD04	須 高坏				体～脚:回転ナデ	体～脚:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	不良	
18 25	F4 SB03 P04	須 埴B		8.2		底:回転ナデ、回転糸切り	底:回転ナデ	灰白色	灰色	3	良	
18 26	F4 SB03 P05	須 坏A	13.4	7.6	2.6	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰色	灰白色	3	良	
18 27	F4 SB03 P04	須 坏A	14.8		3.0	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	3	良	
18 28	F3 SB03 P02	須 埴B	17.2			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰色	灰白色	3	良	
18 29	F4 SB03 P06	須 長頸壺	10.6			口:回転ナデ	口:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	
18 30	F2 SB04 P05	須 広口壺	17.4			口:回転ナデ	口:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	不良	
19 31	F8・9 SR01	須 坏A	11.2	5.0	3.8	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	不良	
19 32	F9 SR01	須 坏A	12.8	8.0	3.1	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	黄褐色	黄褐色	3	不良	口縁内外面に煤
19 33	F8・9 SR01	須 坏A	12.6	8.2	2.9	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	不良	
19 34	F8・9 SR01	須 坏A	13.6	9.0	3.7	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	1	不良	
19 35	F8・9 SR01	須 坏A	13.8	9.0	2.8	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
19 36	F8・9 SR01	須 坏A	12.8	8.4	2.8	口～底:回転ナデ、ヘラ切り	口～底:回転ナデ	黄灰色	黄灰色	4	良	
19 37	F8・9 SR01	須 坏A	11.8	7.6	3.3	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	3	良	
19 38	F8・9 SR01	須 埴A	13.0	7.8	4.1	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	1	不良	
19 39	F8・9 SR01	須 坏A				体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	4	良	
19 40	F8・9 SR01	須 坏A				底:ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ	明青灰色	明黄灰色	1	良	墨書
19 41	F8・9 SR01	須 坏A		9.4		底:ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	良	墨書
19 42	F8・9 SR01	須 坏A		10.0		底:ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ	青灰色	灰白色	3	良	墨書
19 43	F8・9 SR01	須 坏A	13.0			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰色	灰色	3	良	
19 44	F8・9 SR01	須 皿	15.4	12.4	2.6	口～体:回転ナデ 底:回転ヘラケズ	口～底:回転ナデ	灰白色	黄灰色	1	不良	
19 45	F8・9 SR01	須 皿	16.6	12.8	2.1	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
19 46	F8・9 SR01	須 皿	16.0	12.6	1.7	口～体:回転ナデ 底:回転ヘラケズ	口～底:回転ナデ	黄灰色	灰白色	1	良	
19 47	F8・9 SR01 F8 SK16	須 坏B	10.4	7.2	4.1	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	1	良	
19 48	F8・9 SR01	須 坏B	12.8	7.4	4.2	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	黄灰色	3	良	
19 49	F9 SR01 E9 F9 包	須 坏B	12.8	8.2	4.1	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	外面全体に自然釉
19 50	F9 SR01	須 坏B		9.2		底:ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	墨書
19 51	F8・9 SR01	須 坏B	15.0	9.2	3.9	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	3	良	
19 52	F8・9 SR01	須 坏B		10.2		体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
19 53	F8・9 SR01	須 坏B	13.4	9.4	4.2	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	灰色	灰白色	4	良	
19 54	F8・9 SR01	須 坏B	15.8	11.6	5.2	口～底:回転ナデ	口～底:回転ナデ	灰色	褐灰色	3	良	
19 55	D9 SR01 E9 F8 包	須 坏B	16.8	11.8	5.7	口～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	黄灰色	灰白色	1	良	底部外面に 重ね焼き痕
19 56	F8・9 SR01	須 坏B		17.2		体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰黄色	3	良	内面に墨
19 57	F8・9 SR01	須 坏蓋	14.0			口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	良	口縁外面に自然釉
19 58	F8・9 SR01	須 坏蓋	14.4		2.6	口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
19 59	F8・9 SR01 F9・10 包	須 坏蓋	15.8			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
19 60	F8 SR01	須 坏蓋	14.8		3.0	口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	4	良	
19 61	F9 SR01	須 坏蓋				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
19 62	F9 SR01	須 坏蓋	15.6		2.6	口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	
19 63	F8・9 SR01	須 坏蓋	17.0			口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	不良	口縁内面に煤
19 64	F8・9 SR01 F8 SK15 SK16 SP315 F8 包	須 坏蓋	17.4			口～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	

第4章 遺構・遺物

挿図 番号	出土区/遺構	器種	口径	底径	器高	調整/施文		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	外面	内面			
19 65	F9 SR01	須 杯蓋	14.6			ロ～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～体:回転ナデ	灰白	灰白	1	良	墨書
19 66	F9 SR01	須 埴B		5.8		底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ、ナデ	灰黄色	灰黄色	1	不良	全体的に摩滅
20 67	F8・9 SR01	須 長頸瓶		8.0		体～底:回転ナデ、回転糸切り	体～底:回転ナデ	灰色	灰黄色	3	良	
20 68	F9 SR01	須 短頸壺	5.0			ロ～体:回転ナデ	ロ～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	不良	肩部に沈線
20 69	F8・9 SR01	須 長頸瓶				体:回転ナデ	体:回転ナデ	黄灰色	灰色	4	良	外面に自然釉
20 70	F8・9 SR01	須 横瓶				体:回転ナデ	体:回転ナデ	黒色	灰色	3	良	円盤状土製で閉塞
20 71	B13 C11 D10 F9 SR01 B10 トレンチ	須 甕	13.4			ロ～体:回転ナデ、カキメ、タタキ	ロ～体:回転ナデ、タタキ	灰色	灰色	4	良	内外面に自然釉
20 72	A13 B13 C11 D10 SR01 F9 包	須 短頸壺				体:回転ナデ	体:回転ナデ	灰色	灰黄色	1	良	内外面に自然釉
20 73	F8・9 SR01	須 広口鉢	21.2			ロ～体:回転ナデ	ロ～体:回転ナデ	灰色	灰白色	4	良	
20 74	D10 E9 F9 SR01 E9 E10 包	須 長頸瓶				体:回転ナデ	体:回転ナデ	灰白色	灰色	4	良	外面に自然釉
20 75	F9 SR01	須 壺		12.6		体～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	灰色	黒色	3	良	
20 76	D10 F8・9 E9・10 SR01 E9 F8・9 包	須 短頸壺		8.6		ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰白色	4	良	外面に自然釉
20 77	F8・9・10 SR01 F8・9 包	須 長頸瓶				体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	体:回転ナデ	灰色	褐灰色	3	良	内外面に自然釉 二次被熱
20 78	F8・9 SR01 F8 SK16 E9 F8 包	須 長胴甕				体:回転ナデ、カキメ、タタキ	体:回転ナデ、タタキ	灰色	灰色	4	良	土師器の須恵質化
21 79	F9 包	須 坏A	10.8	5.4	2.8	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	黄灰色	1	良	
21 80	F8 包	須 坏A	12.2	8.8	3.1	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
21 81	F9 トレンチ	須 坏A	11.8	5.6	3.2	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
21 82	F20 包	須 坏A	12.0	7.6	3.2	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰色	3	不良	
21 83	F8 包	須 坏A	12.4	7.8	3.4	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
21 84	F17 側溝	須 坏A	11.4		3.0	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	1	良	墨書
21 85	F17 側溝 F17 包	須 坏A	12.8	8.0	3.6	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
21 86	F14 包	須 坏A	13.0			ロ～底:回転ナデ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰色	3	良	
21 87	F6・7 包	須 坏A	11.2	7.8	2.9	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
21 88	F17 側溝	須 坏A		8.6		底:ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	1	良	墨書
21 89	F8 包	須 坏A		6.6		底:ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ	灰色	灰色	3	良	漆
21 90	F17 側溝	須 皿	16.8	15.0	2.0	体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ、ナデ	灰白	灰色	3	良	墨書
21 91	F8 包	須 皿	16.6	12.6	2.5	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	4	良	
21 92	F17 包	須 皿	16.2	13.2	2.6	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	灰色	3	良	
21 93	F8 包	須 皿	15.8	12.4	1.8	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰色	3	良	
21 94	F8 包	須 坏B	11.6	7.8	4.0	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
21 95	F9 包	須 皿	18.2	14.0	2.5	ロ～底:回転ナデ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
21 96	F8 包	須 坏B	13.0	9.4	4.2	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ、ナデ	灰色	灰白色	4	良	
21 97	F8 包	須 坏B	14.0	9.8	4.1	ロ～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	黄灰色	灰白色	3	良	
21 98	F9 包	須 坏B	16.8	11.6	5.4	ロ～底:回転ナデ、ナデ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰白色	3	良	
21 99	F10 包	須 壺蓋	9.0			ロ～体:回転ナデ	ロ～体:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	
21 100	F8 包	須 坏蓋	12.8			ロ～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～体:回転ナデ	灰色	灰色	4	良	
21 101	F9 包	須 坏蓋	13.0		3.0	ロ～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～体:回転ナデ	黄灰色	灰色	1	良	口縁内面に墨 口縁外面に自然釉
21 102	F8 包	須 坏蓋				ロ～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～体:回転ナデ、ナデ	灰色	灰色	3	不良	内面に刻文×
21 103	F8 包	須 坏蓋				ロ～体:回転ナデ	ロ～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
21 104	F16 包	須 坏蓋	16.6			ロ～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	不良	
21 105	F8・9 SR01 F9 包	須 坏蓋	17.8			ロ～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～体:回転ナデ	灰色	灰白色	1	良	口縁内面に自然釉
21 106	F9 包	須 坏蓋	18.8			ロ～体:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
21 107	F8 包	須 鉄鉢	15.2	6.8	8.5	ロ～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
21 108	F3・4 包	須 壺		8.4		体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	4	良	
21 109	F13 包	須 甕				口:回転ナデ、櫛描波状文	口:回転ナデ	灰色	褐灰色	1	良	
21 110	F8 包	須 高坏		12.0		脚:回転ナデ	脚:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
21 111	F9 包	須 短頸壺	10.6			ロ～体:回転ナデ	ロ～体:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	外面に自然釉
21 112	F9 トレンチ	須 長胴甕	23.2			ロ～体:回転ナデ、カキメ	ロ～体:回転ナデ、カキメ	灰色	灰色	3	良	土師器の須恵質化
21 113	F8 包	須 長頸瓶	9.0			口:回転ナデ	口:回転ナデ	灰褐色	黄灰色	3	良	
21 114	F18 側溝	須 平瓶		5.8		体～底:回転ナデ、ヘラ切りのちナデ	ロ～底:回転ナデ	灰色	灰色	1	良	
21 115	F4 トレンチ	灰 埴	16.8			ロ～体:回転ナデ	ロ～体:回転ナデ	灰黄色	灰黄色	1	良	口縁内外面に灰釉
21 116	F9 包	灰 埴	15.0			ロ～体:回転ナデ	ロ～体:回転ナデ	灰黄色	灰黄色	1	良	口縁内外面に灰釉
21 117	F9 包	灰 埴		7.8		体～底:回転ナデ、回転糸切りのち 回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	
21 118	F8 包	灰 埴		6.8		体～底:回転ナデ、回転糸切りのち 回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰色	1	良	見込みを除く 内面に灰釉
21 119	F8 包	灰 埴		6.8		体～底:回転ナデ、回転糸切りのち 回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	不良	
21 120	F9 包	灰 埴		7.8		体～底:回転ナデ、回転糸切りのち 回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	見込みを除く 内面に灰釉
21 121	F9 包	灰 皿		6.2		体～底:回転ナデ、回転糸切りのち 回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰黄色	1	良	見込みを除く 内面に灰釉
21 122	F8 包	灰 皿		5.6		体～底:回転ナデ、回転糸切りのち 回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	良	
21 123	F8 包	灰 皿	13.2	6.8	2.5	ロ～底:回転ナデ	ロ～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	見込みを除く 内面に灰釉
21 124	F8・9 包	黒 埴		6.6		体～底:回転ナデ、回転糸切り	体～底:回転ナデ	浅黄色	灰色	1	不良	内面黒色

第2節 遺物

第9表 中世の土器・陶磁器観察表

凡例 器種名は、土師質土器→土、常滑焼→常、越前焼→越と記した。なお、胎土分類の1～4は、例言13による。

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	口径	底径	器高	調整/施文		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	外面	内面			
22 1	F9 SR01	土 埴		2.8		底:回転ナデ、回転糸切り	底:回転ナデ	灰黄色	灰黄色	3	不良	
22 2	F9 SR01	土 埴		4.4		底:回転ナデ、回転糸切り	底:回転ナデ	黄橙色	黄橙色	3	不良	
22 3	F9 SR01	土 埴		4.8		底:回転ナデ、回転糸切り	底:回転ナデ	橙色	黄灰色	1	不良	
22 4	F18 SD02	土 皿	7.6	4.0	1.3	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰白色	灰白色	1	不良	
22 5	F18 SD02	土 皿	8.6	5.4	1.6	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰黄色	灰黄色	1	不良	
22 6	F18 SD02	土 皿	8.8	4.4	1.8	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰白色	灰白色	1	不良	粘土板の成形痕
22 7	F9 包	土 皿	9.4	6.0	1.8	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	灰白色	浅黄橙色	1	不良	
22 8	F18 SD02	土 皿	8.6	6.0	1.4	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰黄色	灰黄色	1	不良	
22 9	F18 SD02	土 皿	8.6	5.6	1.8	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰白色	灰白色	1	不良	
22 10	F18 SD02	土 皿	9.6	5.0	1.6	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰白色	灰白色	1	不良	
22 11	F8 SP291	土 皿	10.0	5.6	1.7	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	浅黄色	黄橙色	1	不良	
22 12	F18 SD02	土 皿	7.8		2.1	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	1	不良	
22 13	F18 SD02	土 皿	8.0	4.8	1.7	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	灰黄色	灰黄色	1	不良	
22 14	F18 SD02	土 皿	8.2	3.8	1.6	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	浅黄色	浅黄色	1	不良	
22 15	F18 SD02	土 皿	8.2		1.3	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	灰黄色	灰黄色	1	不良	
22 16	F18 SD02	土 皿	11.8	6.8	2.2	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰黄色	灰黄色	1	不良	
22 17	F18 SD02	土 皿	11.8	7.4	2.4	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	黄橙色	黄橙色	1	不良	
22 18	F8 SP291	土 皿	14.6	10.0	2.5	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	灰黄色	灰黄色	3	不良	
22 19	F8・9 SR01	土 皿	13.8			口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	浅黄橙色	黄橙色	1	不良	
22 20	F18 SD02	土 皿	13.4	4.4	2.6	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	黄橙色	黄橙色	1	不良	
22 21	F25 SE03	土 皿	14.8	7.6	1.9	口～底:回転ナデ、指頭圧痕	口～底:回転ナデ、ナデ	黄橙色	黄橙色	3	不良	
22 22	F8・9 SR01	山茶埴		6.4		体～底:回転ナデ、回転糸切りのち回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	3	不良	高台に初殻痕
22 23	F7 SK18	土 花瓶				口～底:回転ナデ、回転糸切り	口～底:回転ナデ	橙色	橙色	3	良	
22 24	F21 SE13	土 鍋				口:回転ナデ、指頭圧痕	口:ハケ	橙色	橙色	1	良	
22 25	F9 包	青白磁 合子	4.8	3.6	1.9	体～底:型造り	体～底:型造りのち回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	菊座、口縁、底部露胎
22 26	F19 包	青白磁 合子	4.8	4.6	2.2	体～底:型造り	体～底:型造りのち回転ナデ	明緑灰色	明緑灰色	1	良	菊座、口縁、底部露胎
22 27	F19 包	白磁碗		5.2		底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	底部外面露胎
22 28	F9 包	白磁碗				体～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	底部外面露胎 見込み釉剥ぎ
22 29	F19 トレンチ	白磁皿		7.0		体～底:回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	全面施釉
22 30	F10 包	白磁皿		2.4		底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	底部外面露胎
22 31	F19 包	白磁皿		4.0		体～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	1	良	底部外面、見込み露胎
22 32	F18 SD02	青磁碗				体:回転ナデ、櫛描文	体:回転ナデ、劃花文	灰オリーブ色	灰オリーブ色	1	良	底部外面露胎
22 33	F18 SD02	青磁碗		5.0		体～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	体～底:回転ナデ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	3	良	底部外面露胎
22 34	F20 包	青磁碗		5.0		体～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	体～底:回転ナデ	オリーブ灰色	オリーブ灰色	1	良	底部外面露胎
22 35	F17 包	青磁碗		5.0		体～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	体～底:回転ナデ	オリーブ灰色	オリーブ灰色	1	良	底部外面露胎
22 36	F2 包	青磁碗	17.8			口～体:回転ナデ、縞蓮弁文	口～体:回転ナデ	緑灰色	緑灰色	1	良	
22 37	F11 SP78	青磁碗	14.8			口～体:回転ナデ、細線描蓮弁文	口～体:回転ナデ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	1	良	漆継ぎ
22 38	F10 包	青磁碗	12.0			口～体:回転ナデ、細線描蓮弁文	口～体:回転ナデ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	1	良	漆継ぎ
23 39	F9 トレンチ	常 甕				口:回転ナデ	口:回転ナデ	明灰黄色	灰黄褐色	4	良	
23 40	F23 側溝	越 甕				口:回転ナデ	口:回転ナデ	褐色	褐色	3	良	
23 41	F11 SR02	越 甕		21.2		体～底:回転ナデ	体～底:回転ナデ	灰色	灰白色	4	良	体部内面刻文、内面漆布
23 42	F11 SR02	越 鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	浅黄色	浅黄色	4	不良	
23 43	F18 SD02 F18 側溝	越 鉢	31.4	15.8	16.5	口～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	口～底:回転ナデ	黄灰色	黄灰色	4	良	
23 44	F11 SR02	越 鉢		13.4		体～底:回転ナデ、回転ヘラケズリ	体～底:回転ナデ	灰白色	灰白色	4	良	
23 45	F24 SD01	越 播鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	黄灰色	灰黄色	4	良	播目11条
23 46	F11 SR02	越 播鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	褐色	褐灰色	4	良	播目8条以上
23 47	F11 SR02	越 播鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	褐色	黒褐色	4	良	播目14条以上
23 48	F11 SR02	越 播鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰黄褐色	黄褐色	4	良	播目14条
23 49	F11 SR02	越 播鉢		15.0		体～底:回転ナデ	体～底:回転ナデ	明褐灰色	橙色	4	良	播目13条
23 50	F22 SE05	越 播鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	褐色	褐色	3	良	播目4条以上
23 51	F8 トレンチ	越 鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	明褐色	灰白色	3	良	
23 52	F22 SE05	越 播鉢				口～底:回転ナデ	口～底:回転ナデ	褐色	褐色	4	良	播目8条
23 53	F21 SE08	越 播鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	褐色	褐色	4	良	播目11条
23 54	F21 SE08	越 播鉢				口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	灰黄色	灰色	4	良	播目11条
23 55	F21 SE08	越 播鉢		15.6		体～底:回転ナデ	体～底:回転ナデ	黄橙色	浅黄橙色	3	良	播目11条、漆継ぎ
23 56	F9 包	常 甕				体:ナデ	体:ナデ、指頭圧痕	褐色	灰黄色	3	良	凹型格子目の押印
23 57	F19 包	越 甕				体:ナデ	体:ナデ、指頭圧痕	灰色	灰白色	3	良	車輪文と凹格子目の押印
23 58	F19 包	越 甕				体:ナデ	体:ナデ、指頭圧痕	浅黄色	灰白色	3	良	57と同一個体
23 59	F24 包	越 甕				体:ナデ	体:ナデ、指頭圧痕	灰黄色	黄灰色	3	良	凹本と凹格子目の押印
23 60	F13 包	越 甕				体:ナデ	体:ナデ、指頭圧痕	灰黄褐色	褐色	3	良	凹大と凹格子目の押印

第10表 土製品観察表

単位：cm、g

挿図 番号	出土区/遺構	器種	長さ	幅	重さ	胎土	備考
24 1	F4 包	土 鉢	4.4	2.6	23.2	1mm位までの黒、白、赤色粒子を表面上に多く含む	内部孔は1cmを測る

第11表 石器観察表

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	形態	石質	器長	器幅	器厚
25 1	F22 包	打製石斧	短冊形。	安山岩	21.6	7.0	2.5
25 2	E12 F12 包	打製石斧	短冊形。やや厚手。	安山岩	16.9	6.3	3.0
25 3	F9 SR01	打製石斧	撥形。左側边上位が僅かに内湾する。	安山岩	13.7	8.0	2.8
25 4	F20 包	打製石斧	分銅形。右側边中程に潰れ。刃部右半磨減。	安山岩	15.6	8.0	3.0
25 5	F21 SR03	打製石斧	分銅形。基端に素材面を残す。	安山岩	14.6	8.8	1.5
25 6	F19 包	打製石斧	分銅形。板状礫が素材。基端に素材面を残す。	安山岩	15.3	10.3	3.3
25 7	F20 トレンチ	打製石斧	分銅形。両側边中程に潰れ。	安山岩	17.9	10.3	3.5
25 8	F8 包	石錘	打欠石錘。	安山岩	9.0	5.1	3.0

第12表 石製品観察表

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	形態	石質	器長	器幅	器厚
26 1	F25 包	粉挽臼	下臼。被熱し赤化。半欠。	砂岩	15.4	24.8	12.5
26 2	F23 包	茶臼	台部。小和清水産。白面の芯棒孔周辺に同心円状の擦痕。3/4欠。	花崗質砂岩	13.8	21.2	11.4

第13表 漆器観察表

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	上絵						法量					備考	
			内面	外面	漆絵				口径	器高	見込み の深さ	高台			見込深 /口径
					位置	色	種類	径				高			
27 1	F22 SE08	椀	黒	黒	内外	見込み、側面	朱	楡扇文	12.0		5.0		0.42	底部外面に線刻	

第14表 木製品観察表

単位：cm

挿図 番号	出土区/遺構	器種	長さ	幅	厚さ	備考
27 2	F19 SE10	底板	12.1		0.8	
27 3	F9 SR01	底板	11.5	10.9	1.0	竹製の釘が残存(埋釘痕)
27 4	F9 SR01	箱側板	15.0	9.2	1.1	上下端部を5mm程切り込む
27 5	F9 SR01	木札		2.0	0.9	水平な上部の下位の左右を切り込む
27 6	F7 SK18	将棋駒	2.7	1.9	0.4	裏面は平坦で、表面は駒尻から駒先に向け僅かに下る

第5章 まとめ

太田・小矢戸遺跡は、報告のとおり主に古代から中世までの集落遺跡である。調査区の大半は、中部縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を行った中縦区に含まれるため、本調査区のみで全容を知り得ることは困難だが、調査で得た成果を整理して総括とする。なお、弥生時代後期の主な遺構は、溝数条と旧河道のみで生活空間の把握はできていないが、本調査区の西方に展開する可能性が高い。

第1節 古代の遺構・遺物

検出した主な遺構は、掘立柱建物4棟と土坑13基、溝14条と旧河道1条である。SD02以北の掘立柱建物SB01～04は、各建物の柱穴から古代の遺物が出土した点、SD02以南は中世の遺物が多くを占める状況から古代に属すると判断した。方位を概ね揃えた建物の計画的な配置と、床面積45㎡を測るSB03からは公的な施設の存在が窺える。遺物は8世紀後半～9世紀中頃にかけて多く確認できるため、付属する遺構群の盛期も同時期と理解できよう。

次に、出土品の様相からみた遺跡の性格に触れておく。遺物の大半は須恵器だが、多くを占める供膳具中には識字層の常駐を示す転用硯と一定量の墨書土器を含む。文字の判読可能な資料は限られるが、人名の「成女」と施設名の「但領カ」を認める。中縦区でも人名は「戌人」と「□女」、施設名は「家」のほか、施設を方位により区分呼称した「南」や炊事場を示すと考えた場合に厨房施設に相当する「炊」がある。また、一般集落では認めないとされる「酒」の文字を含む「酒富」が出土している。なお、中縦区では墨書土器以外にも、位階を表す石製巡方や公的施設とされる遺跡での出土頻度が高い権状錘を認める。以上を考慮すると、本遺跡が一般集落とは様相が異なる公的性格を有する集落である点を指摘できる。「公的」と位置付けても国・郡・郷と様々だが、中縦区でも整理段階の現時点で、集落の階層性を左右する定型硯を認めないため、大野郡資母郷に位置する地方末端の行政機関と考えられる。東を真名川、西を清滝川に挟まれるものの本遺跡より高い標高地に位置する大規模集落である横枕遺跡との比較検討が待たれる。

第2節 中世の遺構・遺物

検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟と井戸13基、土坑2基と溝5条および旧河道1条である。SD02以南に集中する井戸は、出土品から13世紀代と15世紀後半～16世紀代の2時期に分かれるため、周辺に濃密に分布してSB05などを構成する柱穴群も時期が異なると判断できる。SD02以北はSK18とSR02が主な遺構だが、中縦区に井戸側上部に横板組ないし石組みをもつ13世紀代の井戸3基があり、SR02付近に耕作地が展開したとも推察できる。

出土品には、土師質皿と越前焼と輸入陶磁器のほかに、土師質の華瓶、常滑焼の甕と山茶碗、将棋の駒や茶臼などを認める。この内、希少品である青白磁合子は特筆に値し、茶臼からは点茶を嗜む有力階層の存在を窺える。また、遺跡の性格を考慮する際に重要な将棋の駒は、駒種は不明だが、県内では一乗谷朝倉氏遺跡出土品に次いで2例目である。上部を斜めに削ぎ鋭角に仕上げる特徴は、韓国・新安沖出土品よりも新出的で、15世紀後半頃の静岡県小川城跡出土品と似る。ともに出土した瀬戸焼の華瓶を模倣した土師質土器も、同器種が大窯期に消失する点を考慮すると上記の時期に収まる。

次に、太田・小矢戸遺跡の周辺がどのような環境であったかを述べて結びとしたい。

北流する赤根川流域には、応徳3年（1086）に「絹の荘園」と呼称される牛原荘の立荘する低湿地帯が広がる。醍醐寺座主が支配した牛原荘の荘域は、在任する国司の意向でその都度変化した。最終的には清滝川以西、現大野市街地の北半部以北と確定されており、本遺跡も含まれたと推察できる。鎌倉時代には、源平争乱で軍事的勢力として活動した平泉寺を牽制する目的でいち早く地頭が置かれたが、幕府滅亡時に地頭・淡川時治が平泉寺衆徒による襲撃で自害している。なお、当概期の荘域に位置する下丁遺跡からは、2間×2間の総柱建物や同安窯系を始めとする貿易陶磁器と土師質皿が多く出土している。本調査区で青白磁合子を認めることも牛原荘との関連性で理解できよう。鎌倉幕府滅亡後の牛原荘に、南北朝の動乱時に南朝から北朝に寝返った平泉寺が勢力を伸ばした時期もあったようだが、応仁の乱までは醍醐寺領として推移した。ただ、朝倉氏による支配後は牛原荘北部までが平泉寺賢聖院領となり、天文8年（1539）の『賢聖院院領目録』には「矢戸村分」として太田村、小矢戸村、大矢戸村を認める。遺物の暦年代が明確でない現状で、15世紀後半の遺構や遺物を両領域に振り分ける作業は困難なものの、点茶や将棋を嗜む有力階層の存在した本遺跡の歴史背景の一端は把握できよう。

交通路についても本遺跡の所在する大野盆地北西部は、福井・勝山に至る要衝であり、特に旧勝山道は市街地内の七間を起点とし美濃街道から分かれ北進し、太田、小矢戸を経て勝山の下荒井へと至る。また、太田で旧勝山道と分かれ、大矢戸の北側にある矢戸坂を越えて勝山の矢戸口に至る下鹿道も存在した。本遺跡は、中世には大野と勝山間を結ぶ経路沿いの集落として継続し、前記した見解に従うならば、奢贄品を購入できるだけの財力を有した富裕層が存在したと判断できる。

参考文献

- 大野市史編さん委員会 1991 『大野市史 地区編』
- 勝山市 2006 『勝山市史 第2巻 原史～近世』
- 釘谷 紀 2006 「福井県墨書土器概観」『越前町文化財調査報告書Ⅰ』越前町教育委員会
- 出越茂和 1998 「古代墨書土器の諸問題」『古代北陸と出土文字資料』石川県埋蔵文化財保存協会
- 奈良国立文化財研究所 1998 『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』
- 平川 南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『中丁遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『下丁遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『第24回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『第25回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『第26回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県 1993 『福井県史 通史編1 原史・古代』
- 福井県 1994 『福井県史 通史編2 中世』
- 水野和雄 1990 「将棋の流行」『古代史復元10 古代から中世へ』講談社
- 望月精司 1998 「古代の硯と墨書土器—石川県内の消費地資料における硯と墨書土器の出土傾向—」『古代北陸と出土文字資料』石川県埋蔵文化財保存協会
- 望月精司 2003 「古代権状錘に関する一考察—北陸出土権衡資料の検討を中心として—」『北陸の古代と土器 北陸古代土器研究第10号』

写 真 图 版



(1) 0～4列遺構検出状況(南東より)



(2) 5～13列遺構検出状況(南東より)



(3) 14～26列遺構検出状況(南東より)



(4) 14～26列遺構検出状況(北西より)



(1) SB01(北方より)



(2) SB03(南方より)



(3) SB04(南方より)



(4) SB05(北方より)



(5) SE04(南東より)



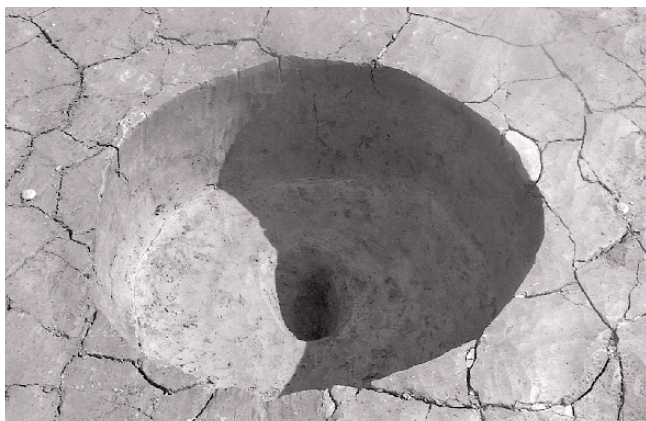
(6) SE05(北西より)



(7) SE07(南方より)



(8) SE13(北東より)



(1) SK09(南東より)



(2) SK12(北西より)



(3) SK05・06・07(西方より)



(4) SK16遺物出土状況(西方より)



(5) SD01(北西より)



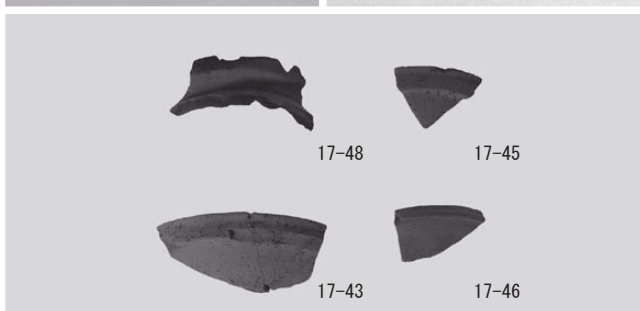
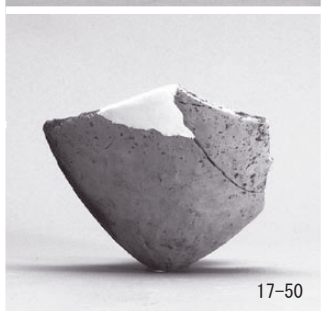
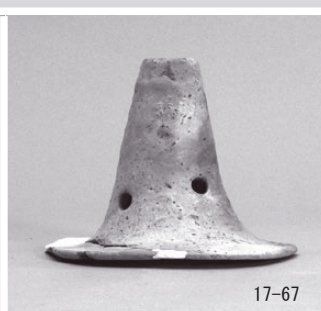
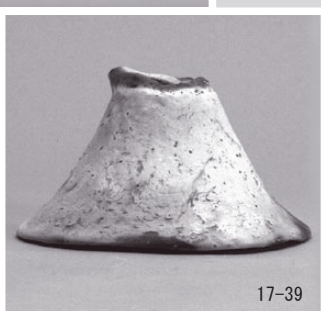
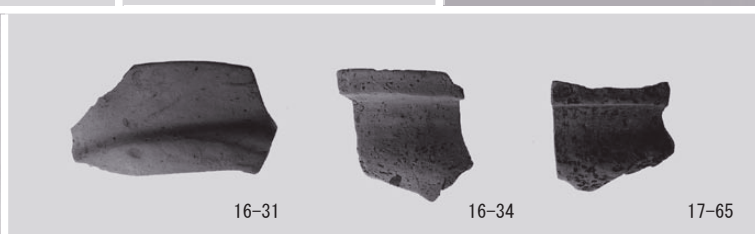
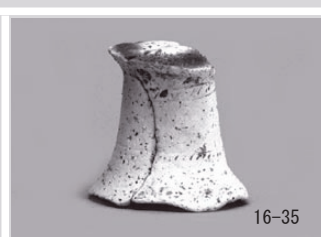
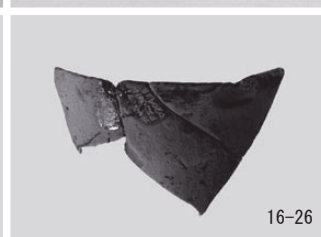
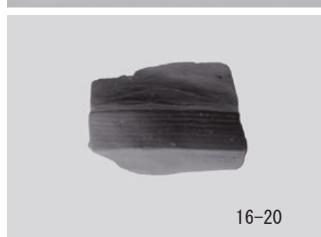
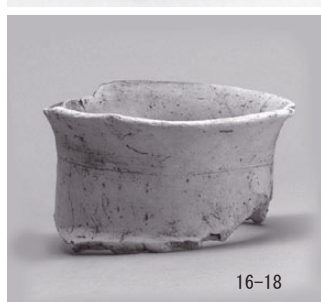
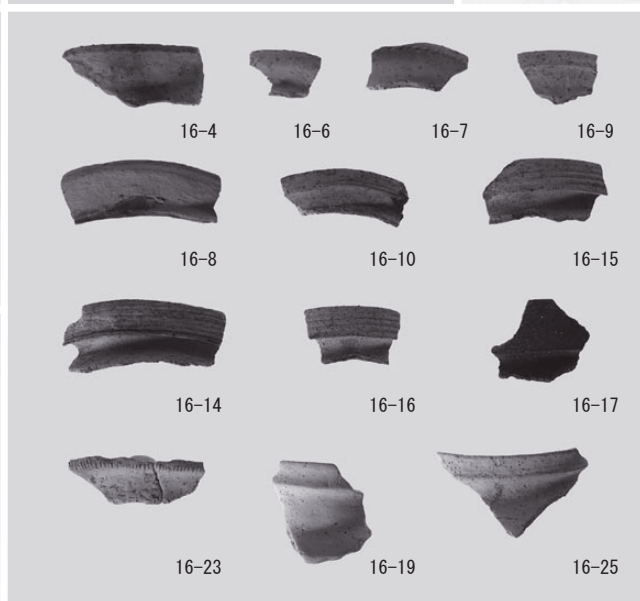
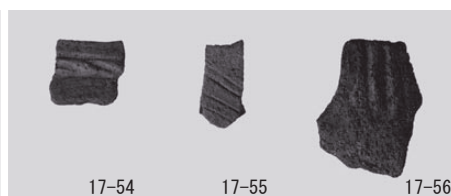
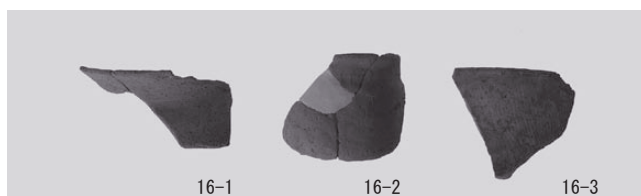
(6) SD02(東方より)

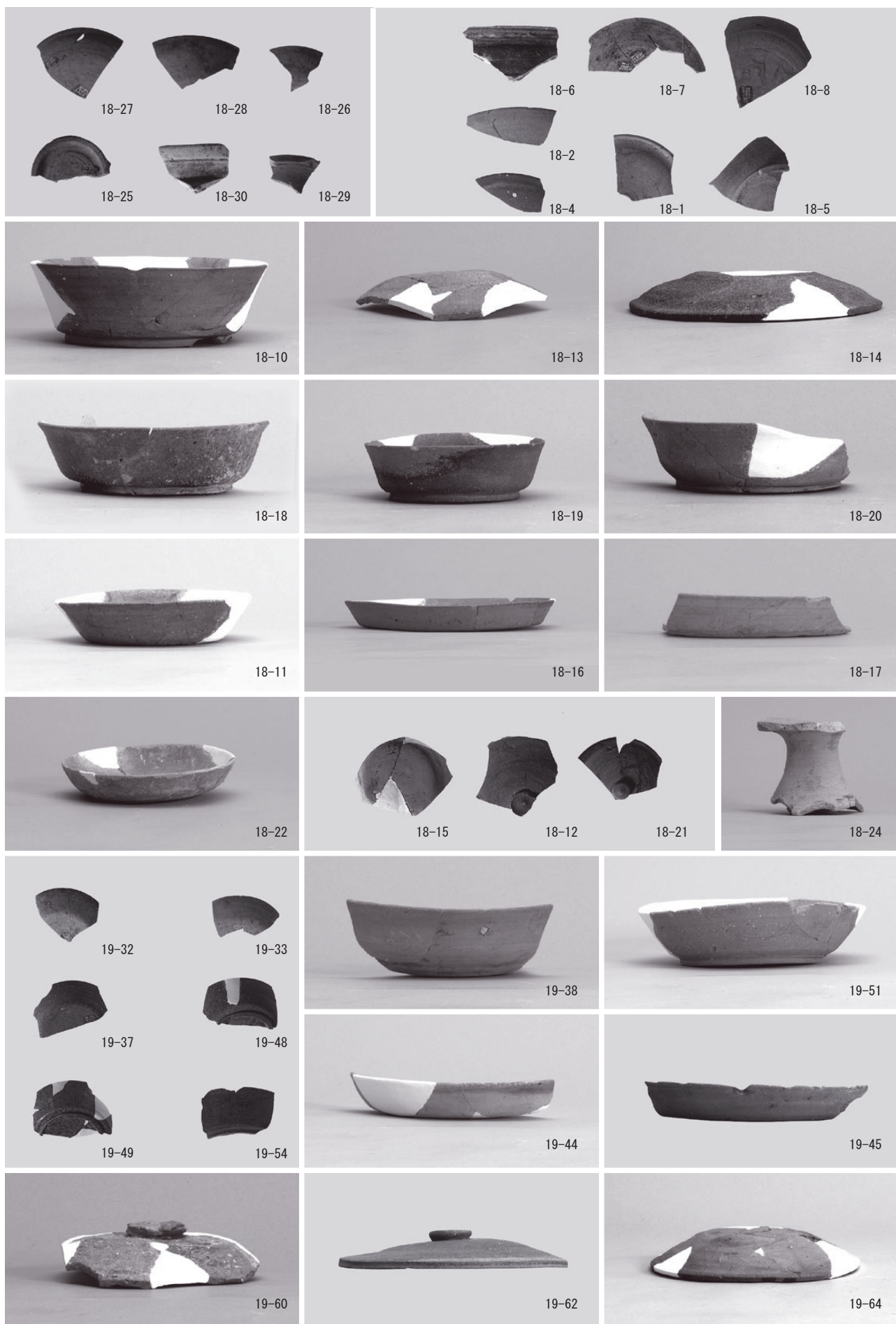


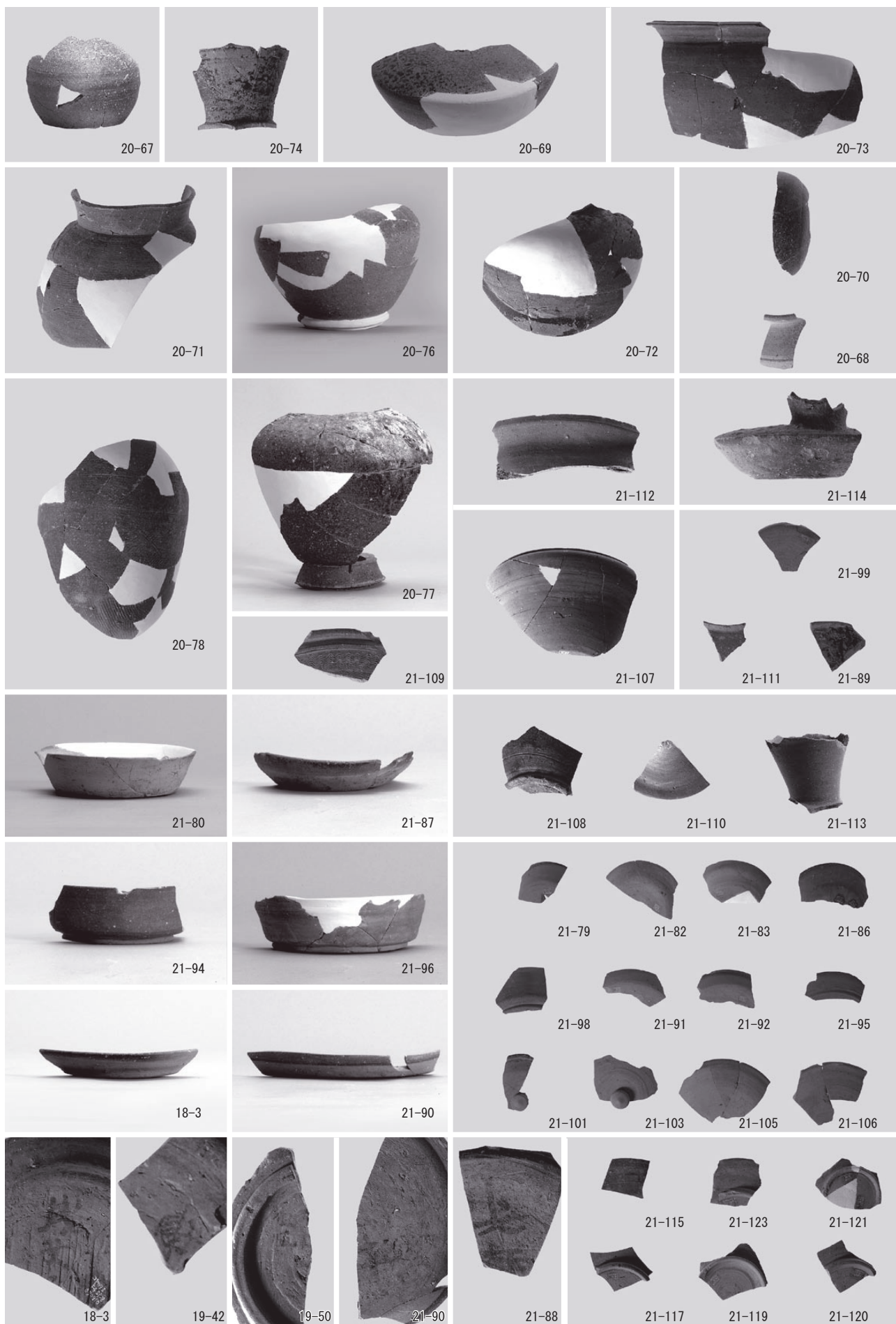
(7) SR01(東方より)



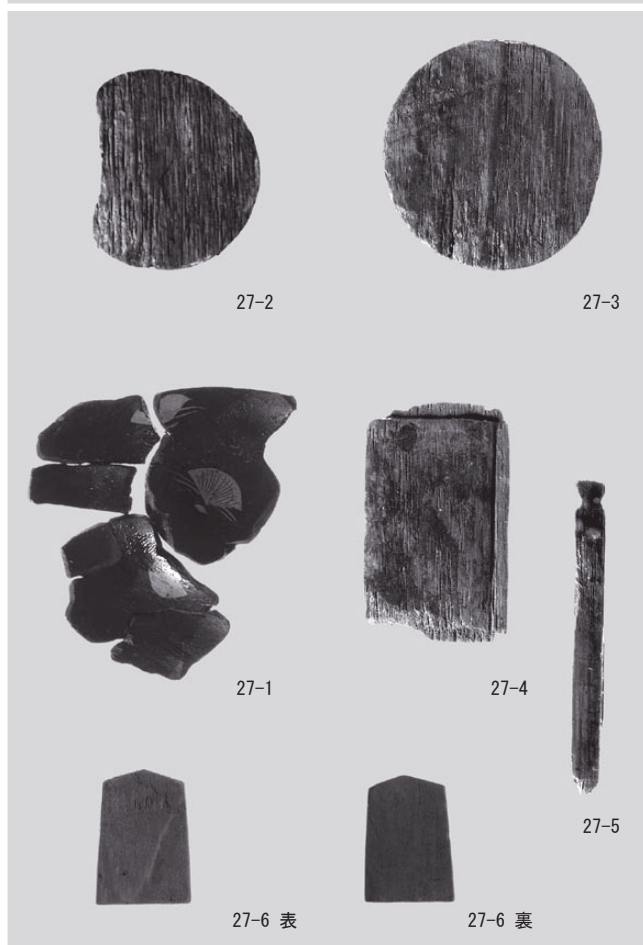
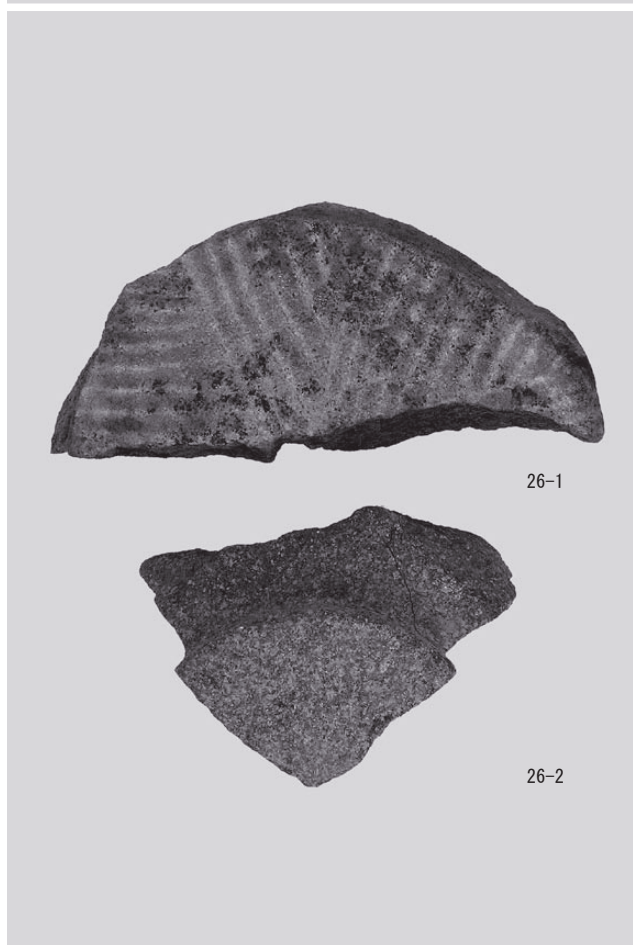
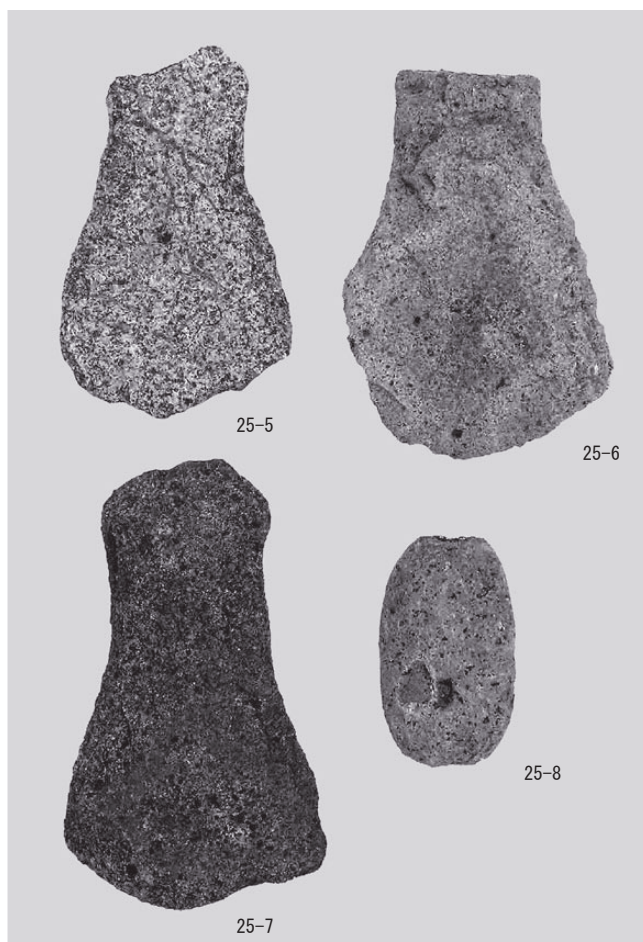
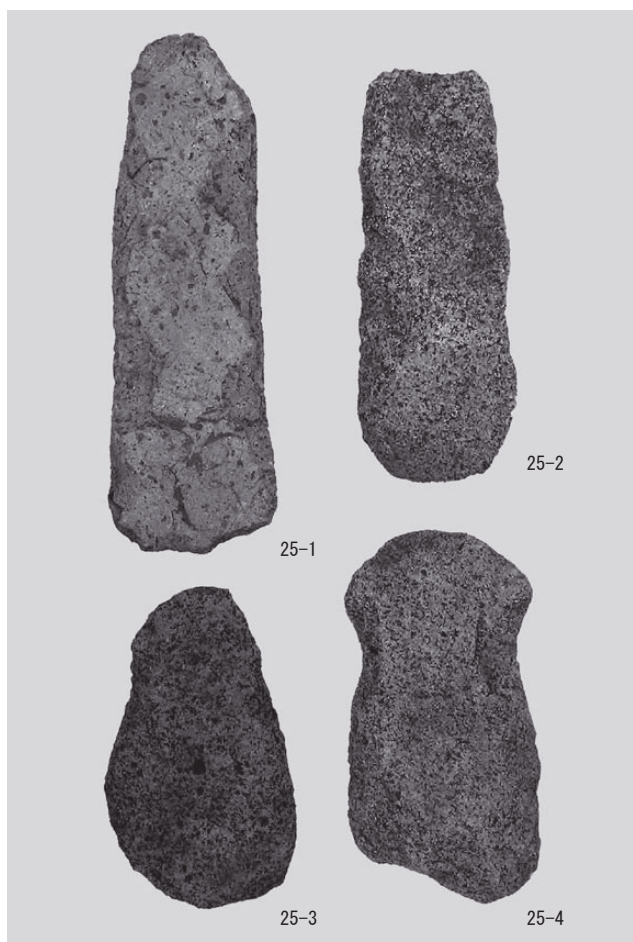
(8) SR02(北東より)











報 告 書 抄 録

ふりがな		おおた・こやといせき						
書名		太田・小矢戸遺跡						
副書名		一般県道本郷大野線道路改良工事に伴う調査						
巻次								
シリーズ名		福井県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号		第142集						
編著者名		木村孝一郎 田中勝之 宮崎認 杉山拓己						
編集機関		福井県教育庁埋蔵文化財調査センター TEL：0776-41-3644						
所在地		〒910-2152 福井県福井市安波賀町 4-10						
発行年月日		西暦 2013 年 3 月 22 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおた・ こやといせき 太田・ 小矢戸遺跡	ふくいけん 福井県 おおのし 大野市 おおた・ こやといせき 太田・ 小矢戸	18205	05004	36° 0′ 42″	136° 29′ 33″	20090401 ～ 20091030	1,810 ㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
太田・ 小矢戸遺跡	集落跡	弥生 奈良・平安 中世	掘立柱建物 井戸 土坑 溝 旧河道		弥生土器 須恵器 土師器 越前焼 土師質皿 輸入陶磁器 石器・石製品		旧河道出土の多量の 須恵器中に、定量 の墨書土器を認めた。	
要約	太田・小矢戸遺跡は、赤根川左岸の微高地上に立地する集落遺跡である。今回の調査では、弥生時代の溝と旧河道のほか、奈良・平安時代の掘立柱建物や土坑、中世の井戸を検出した。特に旧河道出土の多量の須恵器中に定量の墨書土器を認めることは、当地における識字層の存在を示唆する。これらの遺構や遺物は、当概期の集落遺跡の調査例が少ない大野市域においては、地域の歴史を考える上で貴重な資料である。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第 142 集

太田・小矢戸遺跡

－ 一般県道本郷大野線道路改良工事に伴う調査 －

平成25年 3 月 8 日 印刷

平成25年 3 月22日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
